JICA海外協力隊向け実践ガイド

クロスロード

CROSSROADS

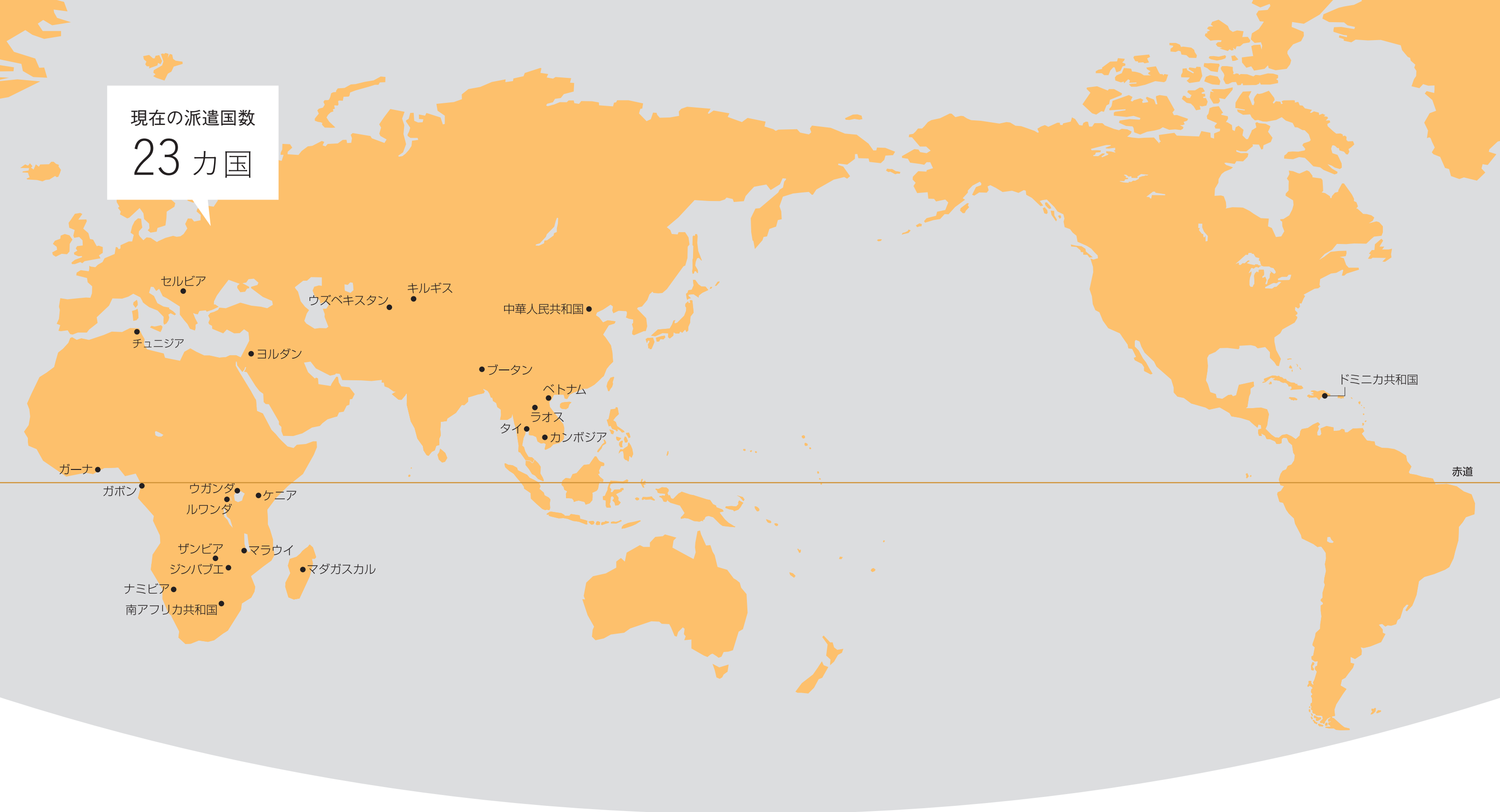
9

2021 SEPTEMBER

特集

保健・医療分野の活動ポイント

派遣国の横顔 ～ガーナ～



JICA海外協力隊 派遣現況

（2021年7月末現在、単位：人）

■ アフリカ地域

国名	一般	シニア
ウガンダ	5	
ガーナ	8	
ガボン	5	1
ケニア	6	
ザンビア	2	1
ジンバブエ	5	
ナミビア	1	
マダガスカル	1	
マラウイ	3	
南アフリカ共和国	1	
ルワンダ	8	

■ アジア地域

国名	一般	シニア
ウズベキスタン	1	
カンボジア	8	
キルギス	1	
タイ	1	
中華人民共和国	2	
ブータン	1	
ベトナム	2	
ラオス	9	2

■ 欧州地域

国名	一般	シニア
セルビア	2	

■ 中東地域

国名	一般	シニア
チュニジア	1	
ヨルダン	3	

■ 中南米地域

国名	一般	シニア	日系一般	日系シニア
ドミニカ共和国	8		3	

■ 合計

	一般	シニア	日系一般	日系シニア	小計
派遣中 （男性／女性）	84 （42／42）	4 （2／2）	3 （2／1）	0	91 （46／45）
累計 （男性／女性）	45,814 （24,322／21,492）	6,556 （5,300／1,256）	1,542 （597／945）	547 （252／295）	54,459 （30,471／23,988）

一般＝青年海外協力隊／海外協力隊
シニア＝シニア海外協力隊
日系一般＝日系社会青年海外協力隊／日系社会海外協力隊
日系シニア＝日系社会シニア海外協力隊

クロスロード

2021 SEP.

Contents

■職種別索引	掲載ページ
コミュニティ開発	6、24、30、36
食品加工	20
青少年活動	26、32
PCインストラクター	8
理科教育	4
体育	4
小学校教育	18
料理	36
看護師	10
鍼灸マッサージ師	21
理学療法士	16
栄養士	14
感染症・エイズ対策	12

■国別索引	掲載ページ
ウズベキスタン	16
エクアドル	36
ガーナ	6、8、36
ガボン	12
ケニア	21
サモア	4
タンザニア	4
ドミニカ共和国	24
パラグアイ	10、32
フィジー	14
フィリピン	20
ベナン	30
ボリビア	18
マラウイ	29

■出身都道府県別索引	掲載ページ
北海道	10
福島県	24
千葉県	6、14
東京都	30
神奈川県	32
長野県	21
石川県	8
静岡県	12
三重県	28
和歌山県	20
福岡県	16
鹿児島県	18

【凡例】

JICA海外協力隊の方々（経験者を含む）については、次のように表記しています。

国際協子さん（ウガンダ・青少年活動・2021年度1次隊）
氏名　派遣国　職種　隊次

JICA海外協力隊の種類（呼称）は、「青年海外協力隊」「海外協力隊」「シニア海外協力隊」「日系社会青年海外協力隊」「日系社会海外協力隊」「日系社会シニア海外協力隊」があります。特に明記されていない場合は「青年海外協力隊」となります。

本誌は、JICA海外協力隊が活動・生活を円滑に行うための実践的な情報、および帰国後の進路開拓や社会還元に関する有益な情報を提供し、対象者に配布しています。

ロゴタイプデザイン：（株）AND
レイアウト：（株）AND
印刷・製本：弘報印刷（株）

4 **JICA Volunteers' Reports**
▶サモアを支援する国際協力NGOの事業が太平洋・島サミットの記念事業に認定（日本）
▶アフリカと日本をスポーツウェアでつなぐブランドをスタート（日本）

派遣国の横顔 ～ガーナ～

6 **計画・行政**
柏木健太さん（コミュニティ開発・2018年度1次隊）

8 **人的資源**
西 望弥さん（PCインストラクター・2017年度4次隊）

特集
保健・医療分野の活動ポイント

10 **看護師**
岡部日香莉さん（パラグアイ・2017年度4次隊）

12 **感染症・エイズ対策**
山﨑壮一さん（ガボン・2018年度1次隊）

14 **栄養士**
小幡真希子さん（フィジー・2017年度3次隊）

16 **理学療法士**
富田睦美さん（ウズベキスタン・2017年度3次隊）

18 **"失敗"から学ぶ**
村田良太さん（ボリビア・小学校教育・2018年度1次隊）

20 **希少職種図鑑**
▶食品加工　森田 翠さん（フィリピン・2017年度1次隊）
▶鍼灸マッサージ師　両角大智さん（ケニア・2017年度2次隊）

22 **JICA海外協力隊的プチテクガイド**
マーケティング入門／「香り」で心を癒す

24 **JICA Volunteers' Before ▶ After** ～人生を変えた2年間～
企業組合の職員
穂積翔太さん（ドミニカ共和国・コミュニティ開発・2017年度1次隊）

26 **帰国後よもやま話**
青少年活動隊員篇

28 **Pick Up OB・OG会**
▶青年海外協力隊三重県OB会
▶日本マラウイ協会

30 **先輩隊員のシューカツ記**
株式会社ビィ・フォアード 社員　坂下東士さん（ベナン・コミュニティ開発・2016年度1次隊）

32 **JOCV SPORTS NEWS**

34 **JICA海外協力隊のつぶやき**
お題：「霊」

35 **INFORMATION**

36 **隊員めし**
エクアドルの伝統ココナツ料理「エンコカード・デ・カマロン」

JICA Volunteers' Reports

JICA海外協力隊とその経験者による国内外での注目の活動をご紹介します。

Japan

サモアを支援する国際協力NGOの事業が太平洋・島サミットの記念事業に認定

文＝氏原英敏（うじはらひでとし）（ルマナイサモア 共同代表／サモア・理科教育・2014年度1次隊）、
板垣暁歩（いたがきあきほ）（ルマナイサモア 理事／サモア・理数科教師・2009年度4次隊）

長崎県立上五島高等学校の生徒を対象に行った「世界の島とつながる授業」の第1回の授業

事業概要	
名　称	ルマナイサモア
発　足	2018年12月
事務所	香川県高松市
代表者	■浦崎裕之（サモア・歯科医師・1984年度3次隊） ■氏原英敏（サモア・理科教育・2014年度1次隊）
事　業	サモアにおける歯科医療支援と教育支援
連絡先	info@lumanai-milai.com
ウェブサイト	

私を含む、協力隊員としてサモアで活動した2人が共同代表を務める国際協力NGO「ルマナイサモア」は、2018年の設立以来、サモアで歯科医療の支援を進めてきました。小学校における虫歯予防処置の実施、現地の歯科医師や歯科衛生士を対象とする技術指導などがその活動内容です。さらに20年からは教育分野の支援を開始する予定でしたが、コロナ禍により同国への入国が制限され、歯科医療の支援を含めて現地での活動をすべてストップせざるを得ない状況となってしまいました。

そうしたなか、日本国内でできる事業がないか模索を続け、21年7月、国際理解教育に関する新たな取り組みを開始しました。世界の島国の生活や文化、課題を知ってもらうオンライン授業を、日本の離島の学校に通う児童・生徒たちを対象に行う「世界の島とつながる授業」と名付けたプログラムです。島で暮らす子どもたちだからこそ持つ知識や経験を、自分たちの島や世界の島国の課題解決のために生かそうと志すきっかけをつくることを目的とした事業です。この企画は、サモアと日本の相互理解の増進や友好関係の強化に資するものとして、21年7月に日本と太平洋島嶼国との間で開催された第9回太平洋・島サミット（PALM9）において、記念事業に認定していただくことができました。

7月28日に行った第1回の授業は、五島列島の中通島（なかどおりじま）にある長崎県立上五島高等学校の2年生が対象でした。授業の内容は、ルマナイサモアがサモアで行ってきた活動などについての紹介と、ゲームを通じて世界の現状や課題を知る体験型ワークショップの2部構成です。私たちは協力隊の経験を通じて、「体験」こそ大きな学びにつながると実感していることから、オンラインでありながらも受講者に「体験」の機会をつくることは、授業の内容を計画するうえでどうしても外したくない点でした。そこで、通常は対面で行う既存の国際理解教育用ゲームを、オンラインでもできる形にアレンジして実践することにしました。スムーズに進めることができるのか不安はありましたが、対象校の先生方の協力もあって、ゲームに参加した生徒たちの生き生きとした表情を見ることができ、「体験」にこだわるという方向性は間違っていなかったとうれしく思いました。

1人1人が世界の課題を「ジブンゴト」として捉え、その解決に向けた対策を自分なりに考え、自分の行動を少しだけ変えてみるなど、今、できることから実践していく。そうすることで、笑顔になれる人が増えるのだということに気付いてもらえるきっかけを、「世界の島とつながる授業」によって多くの学校でつくることができるだろうと考えています。もちろん、「世界の島とつながる授業」は太平洋島嶼国の魅力を日本の多くの人に知ってもらう手段にもなります。そのために、今後も内容の改善を積み重ねながら、ルマナイサモアの代表的な活動の1つへと育てていきたいと考えています。Ⓒ

Japan

アフリカと日本をスポーツウェアでつなぐブランドをスタート

文＝棚原 彩（たなはら さやか）（Pa moja 代表／タンザニア・体育・2019年度1次隊）

❶❷❸「Pa moja」の商品例　❹2021年4月に開催した、日本で暮らすアフリカ人と日本人が集うイベントの参加者たち

事業概要	
名　称	Pa moja
発　足	2020年8月
代表者	棚原 彩（タンザニア・体育・2019年度1次隊）
事　業	■スポーツウェアの販売 ■国際交流イベントの開催
連絡先	t.t.pamoja20@gmail.com
ウェブサイト	

私はタンザニアに再赴任することをあきらめて任期を終えることを選んだ直後の2020年8月、「Africa×SPORTSwear」をテーマにしたスポーツウェア・ブランド「Pa moja（パモジャ）」を立ち上げました。商品ラインナップの中心は、アフリカのカラフルなプリント布「キテンゲ」を、シャツやハーフパンツなどにワンポイントであしらうなどしたもので、「スポーツウェア」という角度からアフリカにつながってもらえるようなブランドを目指しています。20年3月にコロナ禍で一時帰国するまでに私が協力隊員として活動できた期間はわずか8カ月間。その悔しさから生まれたブランドです。

ブランド立ち上げを着想したのは、一時帰国した直後の健康観察期間でした。任地の中等学校で体育授業や野球部の支援をするという活動の道筋も見え始めた矢先の一時帰国だったため、当時、「まだアフリカとつながっていたい」という強い気持ちがありました。そのため、タンザニアから持ち帰ったキテンゲの服を着るなどして気を紛らわせていたのですが、ある日、キテンゲのドレスの上からパーカーを羽織って鏡の前に立ってみたところ、その格好良さに心が動きました。「Africa×SPORTSwear」という文字がとっさに頭に浮かび、「私が今、やるべきことはこれだ」と「Pa moja」の立ち上げをそのときに決意しました。

「Pa moja」のコンセプトの1つは、「人を明るくさせる」です。私がタンザニアの人たちから教わったことのなかでもっとも貴重だと感じているのは、人と協力しながら明るく生きることの大切さです。そこで、商品のデザインは「アフリカの明るさ」を表現することを心がけています。どこか派手でパワーを感じてもらえるようなデザイン、身にまとうと「いつもよりポップな1日になる」と感じてもらえるようなデザインです。そうした商品を通じて、悩みを抱えた人が1人でも多く明るく生きられるようになればいいなと考えています。

「Pa moja」のもう1つのコンセプトは、「アフリカの人と日本の人が一緒になる空間を生む」です。21年4月には、日本で暮らすアフリカ人と、「Pa moja」の商品のファンを含む日本人が集うイベントを開催しました。私はタンザニアで、「無知」が時に「偏見」につながるということを学びました。赴任当初、私は現地のことを知らないばかりに「暗い」「怖い」「危険」などの偏見を持っていたからです。「Pa moja」は、商品を媒介にしてアフリカの人と日本の人が一緒になる空間をつくることで、多くの日本人にアフリカについて知っていただきたいと思っています。スワヒリ語で「一緒に」を意味するブランド名の「Pa moja」には、そんな思いを込めています。

立ち上げからようやく1周年を迎えた「Pa moja」は、まだまだ駆け出しのブランドですが、少しずつ前に進んでいきたいと考えていますので、引き続き多くの方にご支援いただければ幸いです。Ⓒ

派遣国の横顔

JICA海外協力隊の派遣国ごとに、それぞれの代表的な職種・分野の活動例を、任地の文化や様子と共に紹介します。

ガーナ

Field 1
計画・行政

かしわぎけんた
柏木健太さん
（コミュニティ開発・2018年度1次隊）

PROFILE
1990年生まれ、千葉県出身。大学卒業後、メーカーに4年間、会計事務所に1年間勤務。2018年6月、青年海外協力隊員としてガーナに赴任。20年3月に一時帰国し、同年6月に任期終了。

活動概要
セントラル州エクムフィ郡の役所に配属され、主に以下の活動に従事。
●パイナップル農家の支援（アグリツーリズムの導入など）
●稲作普及の支援

販路開拓や作物の多角化でパイナップル農家の収入向上を支援

パイナップルの生産が盛んな郡の役所に配属された柏木さん。収穫したパイナップルの廃棄率が高いという問題に着目し、農家の収入向上に向けてアグリツーリズムの導入に取り組んだ。

柏木さんが配属されたのは、ガーナ南部に位置するセントラル州エクムフィ郡の役所。地域開発に関する事業の管理を担う地域計画課が所属先となった。同僚は、カウンターパート（以下、CP）となった課長を含めて2人。人口約6万5000人の同郡は農業を主要産業とするが、特に栽培が盛んなのはパイナップルで、国内有数の産地となっている。柏木さんの主な活動となったのは、余剰が出てしまっていたパイナップルの販路開拓を支援すること、および郡内ではそれまでほとんど行われていなかった稲作の普及を支援することだった。

パイナップルの販路開拓

同郡で栽培されているパイナップルは、縦長で甘さが強いシュガーローフという品種。国内の他地域ではあまり栽培されていないものだった。しかし柏木さんが赴任した当時、同郡のパイナップル農家は流通に関する課題を抱えていた。可食期間の短さから輸出には向かない品種であり、主な販路となっていたのは、セントラル州内の市場、および隣接するイースタン州にある外資系の食品会社だった。パイナップルを使ったドライフルーツなどを製造・販売する会社で、農園も持っていたが、その収穫量が不足したときだけエクムフィ郡のパイナップル生産者組合から買い取っていた。そのため注文は安定せず、収穫したパイナップルを廃棄せざるを得ないことが多発していた。

そうしたなかで柏木さんがCPと共に企画したのは、パイナップルを活用したアグリツーリズムの導入だ。セントラル州には、かつて奴隷貿易の拠点とされ、現在はユネスコの世界遺産に登録されている城塞群があり、観光名所となっている。首都から城塞群まではエクムフィ郡を通過する幹線道路が通じており、車で3時間程の距離。幹線道路沿いには同郡の農家のパイナップル農園があったことから、城塞群を見学する日帰りツアーにパイナップル農園の見学を組み込んでもらおうと計画した。ワインやジャムなど、パイナップルの加工品の土産物を生産し、農園の近くに観光センターを置いてツアーの客に販売することで、パイナップルの廃棄率を下げようと考えたのだった。

そうして、2019年度の郡の予算で枠を確保する手続きをCPがとるところまでは順調に進んだが、その後、思いがけず計画が一時中断してしまった。CPが18年度末で異動となり、19年度は課長が不在の状態となったうえ、確保できていた予算の額が少なすぎたため、観光センターの設置が難しくなってしまったのだ。それから1年経ち、20年度の予算では必要な金額を確保することができた。柏木さんは、残る半年ほどの任期でツアーの実現に漕ぎ着けようと準備を開始。ところが、観光センターの設置場所が決まったところでコロナ禍が発生し、一時帰国することとなってしまった。観光業自体の回復の見通しが不透明ななか、アグリツーリズムの立ち上げはコロナ禍が収束した後に持ち越されることとなった。

❶柏木さんと共に他州の市場に赴き、卸先の開拓をするエクムフィ郡のパイナップル農家たち（右の2人）
❷同僚たちに稲作技術の研修を行うAさん（手前）

エクムフィ郡の農家の農園で収穫されたパイナップル。
葉が鋭い品種であり、収穫は長袖・長ズボンで行うため、猛暑の日は過酷な作業になる

モデル農家による稲作の試験的栽培

アグリツーリズム立ち上げの活動を進めることができなかった19年度、柏木さんは稲作普及の支援に活動の重点を移した。活動のパートナーとなったのは、ガーナ食料農業省がエクムフィ郡に置く政策実施機関の職員（以下、Aさん）だ。

ガーナでは当時、米の自給率が5割程度と低迷。政府はこれを引き上げたいと考えており、稲作普及のテコ入れとして、米はすべて適正な価格で政府が買い取るという政策をとっていた。しかし、エクムフィ郡で稲作を行っている農家は1軒に留まっていた。

そうしたなかで19年の初め、柏木さんは陸稲であるネリカ*の栽培技術を学ぶウガンダでの研修にAさんと参加する機会を得た。それまでAさんは稲作についての知識をほとんど持っていなかったが、この研修をきっかけに、柏木さんとAさんはエクムフィ郡での稲作普及に乗り出すことにしたのだった。

最初に取り組んだのは、モデル農家を選んで種もみを無償で提供し、稲作に挑戦してもらうことだ。その栽培を手伝うなかでAさん自身が技術を学び、稲作の指導者としての力を付けていくことを狙った。モデル農家に栽培してもらったのは、4種のネリカと4種の水稲。エクムフィ郡には2本の川が流れており、灌漑をして水稲を栽培することができる場所もあったからだ。

栽培の結果は、雨で圃場が水没したためネリカの3品種は収穫ができなかったが、そのほかはおおむね期待どおりの収穫量だった。翌年も引き続き6農家に稲作をやってもらえることとなったため、収穫の一部は種もみとして翌年の栽培に回し、その他は換金して肥料の購入などに充ててもらうことにした。

栽培期間中、Aさんには自分の配属先の同僚たちに栽培の現場で稲作の技術を伝える研修を実施してもらった。そうして、20年の4月ごろからAさんとその同僚、および柏木さんが手伝いながらふたたびモデル農家たちに稲作栽培に取り組んでもらうつもりだったが、直前にコロナ禍で柏木さんは帰国。しかしその後、Aさんからは20年も無事に収穫できたとの連絡が入った。

任地ひとロメモ
〈セントラル州エクムフィ郡〉

ガーナでは「チーフ」と呼ばれる世襲の長が村を治めている。写真は、エクムフィ郡の村のチーフ（左から2人目）とその一族

右：各村には「クイーンマザー」と呼ばれる名誉職の女性リーダーが存在する。写真はその1人で、染色の仕事をしている
左：発酵させたトウモロコシやキャッサバを練ってつくるガーナ南部の伝統料理「バンク」の調理風景

* ネリカ…アジアイネの高収量性と、アフリカイネの耐乾燥性・耐病虫性などを併せ持つ米の品種。

にし　のぞみ
西 望弥さん
（PCインストラクター・2017年度4次隊）

PROFILE
1989年生まれ、石川県出身。大学卒業後、IT関連企業でコーポレートサイトの構築やシステムメンテナンスに従事。2018年3月、青年海外協力隊員としてガーナに赴任。20年3月に帰国。

活動概要
コフィ・アナン職業訓練校（ノーザン州クンブング郡ヌドゥア）に配属され、主に以下の活動に従事。
- ●ICT授業の実施
- ●コンピュータ教室のパソコンのメンテナンス
- ●姉妹校の職業訓練校や高校でのICT指導

❶西さんが配属先で行った課外授業で、ポスターの制作に取り組む生徒
❷地域の子どもたちを集めてキーボードについての講習を行う西さん

配属先でICT授業を行う西さん

職業訓練校で全コースの共通科目であるICT授業を支援

職業訓練校に配属され、ICT授業の支援に取り組んだ西さん。生徒たちは普段、パソコンに触れる機会が少ないため、そのスキルを学ぶことへの意欲が低かった。そこで彼らが興味を持つ課題を出したところ、意欲が向上するようになった。

西さんが派遣されたのは、ガーナ北部の農村部にある3年制の職業訓練校。服飾や調理など6つのコースが設けられており、中学卒業以上の学歴がある生徒約60人が在籍していた。西さんに求められていたのは、全コースで必修の共通科目となっていたICT授業の支援だ。コマ数は、いずれの学年も1コマ2時間の授業が週に1コマ。専用のパソコンルームも設けられていた。任期の1年目はICT授業を担当する教員が配置されていなかったため、西さんがすべての授業を実施。任期半ばに男性の専任教員（以下、Aさん）が配置されてからは、彼が行う授業のサポートに回るようになった。

グラフィックデザインを軸に

ガーナでは小学校からICT授業が始まる。しかし、授業で使用するパソコンがある小・中学校は少なく、座学で教科書の内容を覚えさせるだけの授業になってしまっているのが一般的だ。しかも、家庭でパソコンが使える小・中学生は限られているため、中学校を卒業するまでにパソコンの実技の力を身につけることは困難な状況となっていた。

パソコンに触れる機会が少なければ、その有用性や楽しさを理解するのは難しい。しかも、配属先の卒業生が就くそれぞれの専門分野の仕事でパソコンを使う機会があることは、まだ稀だ。そのため西さんの着任当初、配属先の生徒たちのICT授業への興味は薄く、授業の出席率は履修者の4分の1程度と低迷した。

まずは出席率を上げなければと考えた西さんは、その解決のためにいくつかの策を試みた。「出席簿」をつくって公表することがその1つ。ほかにも、生徒たちの規律の意識を高めるために、クラスでリーダーを立て、その力を借りながらクラスコントロールを改善することなども行った。しかし、出席率はなかなか上向かなかった。

そこで西さんは、授業の内容を生徒たちの興味を引くものに改善していこうと考えた。配属先には、職業訓練校のICT専門コースに向けてつくられたカリキュラムがあり、西さんはそれを授業の計画に使っていた。その指導内容は、パソコンのハード面の基本的な知識や、Microsoft Officeのソフトの操作方法が中心だ。しかし、ソフトの機能を1つ1つ習得していくことは、生徒たちには退屈なようだと感じられた。そこで西さんは、1回の授業のなかで完成させられるような制作課題を与え、その制作のなかで必要な技術を覚えさせる「実践型」の授業をすることにした。

着目したのは、ガーナでよく貼られている日本にはないタイプの「ポスター」だ。葬式や結婚式、誕生日会などの開催を知らせるポスターなどで、そこには当事者の写真が大きくあしらわれている。そこで西さんは、配属先が必要としているポスターのデザインをWordでつくるという課題を授業で出してみた。すると生徒たちは熱心に制作に取り組んだ。彼らはグラフィックデザイン全般への興味が強いのだろうと考えた西さんは、以後、「Excelを使って自分の写真を配置したカレンダーをつくる」など、さまざまなタイプのグラフィックデザインの課題を授業で多く与えるようにしていった。

西さんは、ガーナの人々は日本人よりも「競争」を好むとも感じていたことから、生徒たちが授業で制作したものは、ときに校内に貼り出し、教員たちに採点してもらって「入賞者」を決めたりもした。

以上のような授業の「内容」の工夫をしていくと、次第に出席率は上昇。任期の半ばごろには、当初の倍ほどにまで達した。

配属先外での活動

任期の半ばにAさんが着任すると、しばらく西さんは彼のサポートに力を入れた。彼の授業で当初課題だったのは、口頭での説明に終始しており、生徒にとってかならずしもわかりやすいものになってはいなかった点だ。そこで西さんは、授業でパワーポイントを活用する方法を伝えたうえで、パソコンの部品など口頭の説明だけでは理解しづらいものは極力写真を見せるようにすべきだといったアドバイスをした。

任期の残りが半年ほどとなったころには、Aさんの授業技術が一定レベルに達した。そこで西さんは、配属先外でのICT教育に関する活動に力を入れるようになった。そうした活動の場の1つは、同じ州にあった配属先の姉妹校にあたる2つの職業訓練校だ。ICT授業の専任教員は配置されていたが、パソコンのメンテナンスに関する知識を持っていなかったことから、西さんは任期の半ばごろからその手伝いに両校をたびたび訪問するようになった。やがてそのうちの1校では授業の支援も行うようになった。ガーナのICT教育に対してできる限りの力になりたいという西さんの思いに配属先が賛同してくれたために叶った活動だ。

配属先の近所にあった高校では、PCインストラクター隊員やコンピュータ技術隊員と共に、パソコンの有用性や楽しさを感じてもらうことを目的としたワークショップを開催。VRやコンピュータグラフィック、プログラミングなどを体験してもらった。事後のアンケートで9割の生徒が「パソコンへの興味が高まった」と回答するなど好評だったが、このワークショップをきっかけに、その高校で週に1回、希望する生徒やICT授業の担当教員を対象とする課外授業を実施するようになった。そこでもやはり、無料の画像処理ソフトなどを使って主にグラフィックデザインの技術を教えた。その課外授業に通った生徒のうちの1人は、後にグラフィックデザインの技術を買われて印刷会社に就職。西さんにとってやりがいの大きい活動となった。

任地ひと口メモ

〈ノーザン州クンブング郡ヌドゥア〉

人口約1000人の農村で、イスラム教徒が住民の大半を占める。家屋は土壁と茅葺屋根のものが一般的だ

右：ラマダン明けの儀式の様子
左：男性が主に農作業を担い、女性と子どもは販売用のシアバターの生産を担う。写真はシアバターをつくる様子

特集

保健・医療分野の活動ポイント

協力隊員が派遣される国々の保健・医療分野の課題には、「専門知識の不足」や「人員の不足」など医療従事者側にある要因以外に、「学校での保健・医療に関する教育の不足」などの社会的要因がある。そうしたなか、協力隊員の立場でできる支援は何か。４つの異なる職種の活動事例を通して、そのポイントを探る。

CASE 1

看護師
パラグアイ

おかべひかり
岡部日香莉さんの事例
（パラグアイ・看護師・2017年度4次隊）

PROFILE
1992年生まれ、北海道出身。大学卒業後、看護師として総合病院に3年半勤務。2018年３月、青年海外協力隊員としてパラグアイに赴任。20年３月に帰国。

協力隊活動
カラジャオ保健センター（カアグアス県カラジャオ市）に配属され、主に以下の活動に従事。
●配属先の待合室、学校、コミュニティなどでの健康教育の実施
●配属先の5S活動の支援

地域のリーダーなどの協力を得て、地域での継続的な健康教育を導入

1次医療施設に配属され、主に病気の予防に関する教育の支援に取り組んだ岡部さん。同僚たちの講習は単発のものに終始していたなか、同じ対象者に継続的に行うプログラムの定着を図った。

岡部さんが配属されたのは、カアグアス県にあるカラジャオ保健センター（以下、「保健センター」）。県の予算で運営されている1次医療施設だ。「保健センター」では、「家族保健ユニット（Unidades de Salud de la Familia／USF）」と呼ばれる国の出先機関が間借りしていた。予防医療を含む1次医療の拡充を目的に、パラグアイ厚生省が各地に配置している機関の1つで、医師や看護師、助産師、健康推進員で構成されている。岡部さんのメインの活動となったのは、このUSFの業務を支援することだった。

5S推進から活動をスタート

「保健センター」でも診療が行われているなか、USFは次のような業務で「保健センター」を補完する立場にあった。

❶高血圧と糖尿病の患者の外来診療の実施
❷乳幼児と妊産婦の健診・栄養改善プログラムの実施
❸在宅療養者の訪問診療の実施
❹疾病予防に関する健康教育の実施

これらのうち、岡部さんの着任当時に手薄となっていたのは❹の業務だ。着任してまもない時期は、講習をスペイン語でこなす自信がなかったため、まずは「保健センター」内の整理・整頓に取り組んだ。カルテ庫の整理がその1つである。棚にカルテが無秩序に並べられており、「取り出しに時間を要する」「1人の患者のカルテが何冊もある」「カルテが見つからないときは診療記録を記入しない」といった問題が起きていた。すべてのカルテを患者の名字と住んでいる地区で分けたことで、適正な診療記録の作成と患者の待ち時間の減少につながった。

語学力がある程度付いてきた着任3、4カ月後には、「保健センター」の待合室に常時10～20人ほどいた患者を対象に、同僚たちにフォローをしてもらいながら10分程度の講習を行うようになった。診療科により待合室にいる患者の層も異なるため、対象患者に合わせて「生活習慣病」「寄生虫症」「インフルエンザ」「デング熱」「がん」「性感染症」などの講習を行った。患者のなかには、読み書きができない人も多かったことから、視覚的に理解できるよう、絵や写真を活用したわかりやすい教材をつくり、講習の質を向上させていった。

地域における継続的な健康教育

地域に出向いて本格的な健康教育に取り組むようになったのは、着任して半年ほど経ったころである。町の人々に顔を覚えてもらい、学校の教員や地域のリーダーとの関係が構築できたことで、地域集会での講習、ラジオ番組での情報発信など、さまざまな機会を利用した活動が展開できるようになった。なかでも手応えを感じたのは、中等教育学校で「青少年クラブ」と名付けて行った5回シリーズの講習だ。岡部さんが着任するまで、USFの同僚が行う健康教育は不定期で単発のものに限られていた。そこで、カウンターパート（以下、CP）のUSFの助産師と共に企画したのが青少年クラブの取り組みだった。

若年妊娠が多いという問題が任地にあったこと、性に関する正しい知識を与えることで若者の自己実現を後押ししたいという強い思いがCPにあったことなどから、青少年クラブでは性教育を実施。男女の体の仕組み、家族計画、性感染症など幅広いテーマを取り上げた。講習の後には生徒たちにアンケートを実施し、質問や感想を自由に書いてもらったところ、なかには初歩的な質問も多く、基本的な知識が中高生に浸透していないことがわかった。生徒からの質問には次回の講習ですべて回答し、疑問を解決するようにした。全講習の終了後、学校側から「重要な教育なので、継続してほしい」との要望があり、次年度以後もUSFのルーチンの活動の1つとなった。

「保健センター」の内外で岡部さんが行った健康教育の受講者のなかには、講習で知った情報に動機づけされて「保健センター」での健診に足を運ぶようになった人もいた。また、岡部さんが自分の果たした役割で意義が大きかったと感じているのは、USFの同僚たちに「計画性」の大切さを理解してもらえたことだ。彼らは保健・医療に関する知識は十分に持ち、住民への健康教育も実践していたものの、無計画で単発な取り組みに終わってしまっていた。同じ対象者に継続してかかわるためには、テーマの割り振りや相手方との日程調整などをこなす「計画性」が必要となる。岡部さんはそれらを自らこなしながら、同僚に要領をつかんでもらうよう心がけた。帰国後、「青少年クラブ」が続いているという知らせを受けていることから、「計画性」の感覚が伝わった可能性は高い。Ⓒ

❶中等教育学校の青少年クラブで健康教育を行う岡部さん
❷中等教育学校の保護者会で健康教育を行ったときの参加者と岡部さん（右端）
❸USFの訪問診療で健康診断を手伝う岡部さん
❹コミュニティ内の高血圧や糖尿病の患者、ハイリスク妊婦などの情報が整理されていなかったことから、コミュニティマップを作成した

OPINION

「保健・医療」と「教育」の深い関係 ～協力隊員がとるべきアプローチとは？～

人々の健康には継続的な教育が不可欠

保健・医療には、経済や社会インフラ、文化、宗教などさまざまな社会的要因が関連していますが、なかでも「教育」はすべての礎となる重要なものだと感じました。算数の基本が身についていなければ、適切な濃度の粉ミルクをつくることや、正しい時間に正しい量の薬を飲むことも難しくなります。啓発パンフレットをつくっても、活字を読む習慣が無い人たちには情報を届けることができません。青少年クラブでは中高生を対象としましたが、多くのことを柔軟に吸収でき、これからの時代を担っていく若者たちに健康教育を行えたことは、非常に意義が大きかったと考えています。健康教育活動は、短期的には定量的かつ明確な成果がわかりにくい分野だと思いますが、継続的な教育を行うことで、かならず将来の人々の健康につながるのではないかと思います。

CASE 2

感染症・エイズ対策
ガボン

潜在する陽性者を掘り起こすための策を実施

HIV／エイズを専門とする医療施設に配属された山﨑さん。力を入れた活動は、感染リスクが高い生活をしている人が検査を受ける機会を増やすための策の実施だ。

山﨑さんが配属されたのは、地方都市のオグエ・ロロ州クラムトゥ市にあるクラムトゥ外来診療センター。ガボンの各州に1、2カ所ずつ設置されているＨＩＶ／エイズ専門の医療施設のなかの1つだ。その主な事業は、ＨＩＶ検査の実施、患者へのカウンセリング・治療薬の提供・栄養指導・在宅支援、地域での予防啓発などである。隣接する州立病院をはじめとする他の医療機関で陽性と判断された患者にも対応していた。山﨑さんに求められていたのは、予防啓発など手薄になっていた事業や業務改善への支援だ。カウンターパート（以下、ＣＰ）となったのは、センター長を務める医師だった。

やまざきそういち
山﨑壮一さんの事例
（ガボン・感染症・エイズ対策・2018年度1次隊）

PROFILE

1978年生まれ、静岡県出身。大学で高等学校の教員免許状（保健体育・福祉）を取得。民間企業に勤務した後、保健体育科や福祉科の教員として高等学校に勤務。2018年7月、青年海外協力隊員としてガボンに赴任（現職参加）。20年3月に帰国し、復職。

協力隊活動

クラムトゥ外来診療センター（オグエ・ロロ州クラムトゥ市）に配属され、HIV／エイズに関する主に以下の活動に従事。
- ●検査の拡充支援
- ●啓発ポスターの作成
- ●患者の収入源確保の支援
- ●配属先の施設の改善支援

ポスターで検査施設を案内

配属先では、対応した患者の情報を月ごとに集計し、政府に提出することが義務づけられていた。しかし、その業務を担当していたのは、パソコンの扱いに不慣れな看護師。集計には関数が組み込まれたＥｘｃｅｌファイルが使われていたが、関数について知らないため、不適切な入力をしていた。そこで山﨑さんが手始めに取り組んだのは、その看護師へのパソコンの指導だ。

そうした活動に取り組んでいた時期、プライベートでの住民との付き合いのなかで、任地のＨＩＶ／エイズに関する課題が見えてきた。任地の酒場に行くと、ほかの客と身の上話になる。そうして山﨑さんがどのような活動をしているのかを伝えると、「実は俺は陽性かどうか心配なんだ」などと打ち明けてくれる人がいた。そうした人はたいてい配属先のことを知らず、検査にはお金がかかるのではないかと心配していたため、山﨑さんは無料であることを伝えた。

「任地では、感染リスクが高いけれども検査を受けていない人が多い」という可能性を察知することができた山﨑さんは、そうした問題を解決するための活動に取り組むことにした。その1つが、配属先の系列施設を含む、ＨＩＶ検査を行っている全国の医療施設の情報をまとめたポスターを作成することだ。現地の人との付き合いのなかで、ガボンでは出稼ぎなどで地元を離れて暮らす期間が長い人が多く、その期間の性行動には感染のリスクがあるということが見えた。配属先だけでなく、全国の医療施設の情報をポスターに盛り込むことにしたのは、出稼ぎなどを終えて山﨑さんの任地から地元に帰った後、そこにある施設で検査を受けてもらえるようにするためだ。

ポスターの構成は、各施設の名称・所在地・電話番号の記載、および外観写真を配置するというもの。原稿は山﨑さん自身が作成した。ＨＩＶ検査を行っている医療施設の情報を集める作業では、ガボンの他地域で活動していた感染症・エイズ対策隊員の力を借りた。

難航したのは、各施設の外観写真の入手だ。道に迷わずにアクセスできるようにするためには外観写真があったほうが良いため、掲載を断念したくなかったが、ＣＰから各施設に外観写真の送付を依頼してもらっても、一向に送ってくれない施設があったのだ。そうした施設については、山﨑さんやほかの協力隊員が自ら撮影をしに行くなどして写真を確保。そうしてようやくポスターが完成したのは着手の約1年後だった。任地の学校などに掲示してもらったほか、ポスターの原稿をＡ4判のチラシに加工し、地域のイベントなどで配布。また、掲載した医療施設にも送付した。

出張無料検査の導入

山﨑さんはポスターの作成以外にも、感染リスクが高いが検査を受けていない人に検査を促すための策に取り組んだ。「出張無料検査」の拡充支援だ。

配属先はそれまでも出張無料検査を定期的に行っていたが、対象は州内のへき地が中心だった。人口が多い地域も対象とすべきだと考えた山﨑さんが企画し、配属先に受け入れられたのは、3カ月に1度、同僚たちが手分けをしてクラムトゥ市内の各地にいっせいに出向き、無料検査の場を設けることだ。

人口が多い地域であれば、検査場に出入りする姿を見られても、見た人は出入りした人がどこの誰なのかがわからない可能性が高いため、「あの人はＨＩＶの検査を受けていた」といううわさが立つことを心配せずに済む。そのため、より多くの人が検査を受けに来てくれることが見込まれた。

「3カ月に1度」という頻度にしたのは、検査をして陽性かどうかが判明するのは3カ月後であり、「先の検査の結果がわかってから、次の検査を受けるかどうかを決める」というサイクルをつくることができるからである。

山﨑さんの提案が実現したのは、任期終盤のこと。市内の4カ所で3カ月の間隔を空けて2回、出張無料検査が実施された。検査を受けた人の数は、配属先で検査を受ける人の半年分にあたる約500人にものぼった。検査結果は、配属先の医師や看護師、臨床心理士などが本人に報告。陽性と判明した人には、治療薬の服用などに関する以後の過ごし方の指導を、陰性だと判明した人には感染予防の方法に関する指導をあわせて行った。

この出張無料検査は、山﨑さんの帰国後も続けられている。Ⓒ

❶クラムトゥ市内で出張無料検査を行った山﨑さんと同僚たち
❷配属先では患者への食事の提供も行っていたが、調理場が戸外で雨の日には調理ができなかったため、山﨑さんの提案で屋根付きの調理場が手づくりされた
❸検査が受けられる医療施設を案内するポスターの前に立つ山﨑さんとCP

OPINION

「保健・医療」と「偏見」の深い関係 〜協力隊員がとるべきアプローチとは？〜

隠れて生きている人を支える

HIVは感染のリスクがある行為を避ければそれを防ぐことができますが、そうした正しい知識が浸透することは難しく、社会は偏見により陽性者を排除しようとしてしまいます。そのため、陽性者や陽性である可能性が高い人はそれを隠して生きていかざるを得ません。任地でも、「実は自分は陽性だけれども、隠して生きている」「実は家族に陽性者がいるけれども、知られないよう離れてひっそり暮らしている」などと告白されたことがありました。不安を抱えながらも周囲に相談することができずにいるそうした人たちにとって、「外部」の人間である協力隊員は頼りやすい存在ではないかと思います。

CASE 3

栄養士

フィジー

小幡真希子（こばたまきこ）さんの事例

（フィジー・栄養士・2017年度3次隊）

PROFILE

1985年生まれ、千葉県出身。女子栄養大学で管理栄養士の免許を取得した後、医療施設で腎不全患者の栄養相談業務に9年半従事。2018年1月、青年海外協力隊員としてフィジーに赴任。20年1月に帰国。

協力隊活動

レブカ病院（オバラウ島レブカ町）に配属され、主に以下の活動に従事。

●病院給食の改善支援
●地域での栄養教育の支援
●患者への栄養教育の支援
●同僚への健康啓発の実施

「地産地消」の促進を軸に病院給食や栄養教育の改善を支援

離島にある総合病院に配属された小幡さん。栄養士に院内外の広範な業務が課せられていたなか、課題が顕著だった病院給食や栄養教育の改善支援に力を入れた。

小幡さんが配属されたのは、人口約9000人の離島・オバラウ島にある国立の総合病院。同島と近隣の小さな島々で唯一、入院設備がある医療施設で、病床数は20床という規模だった。カウンターパート（以下、CP）となったのは、ただ1人配置されていた栄養士。配属先の栄養士が担う業務は、病院給食の管理や患者への栄養教育といった院内の業務のほかに、地域での栄養教育など院外の業務も含む広範なものとなっていた。

病院給食の食材調達を改善

小幡さんが任期前半の活動の柱にしたのは、病院給食の改善だ。特に食材調達や献立の改善に力を入れた。給食の対象となる入院患者は平均で10人程度。「糖尿病患者は主食のキャッサバを1切れ減らす」「貧血がある患者は鉄分が含まれる葉物野菜を増やす」など、患者に合わせた食事が提供されていたが、全般的な問題だったのは野菜が少ない点だ。その原因は、CPの知識の不足ではなく、食材調達のシステムや保存手段にあった。小幡さんの着任当時、米や小麦、冷凍の肉や魚、野菜、缶詰、調味料など、必要な食材はすべて向こう3カ月分をまとめてフィジー保健省に発注し、送ってもらうシステムになっていた。一方、配属先の調理場には冷蔵庫と冷凍庫があったが、冷蔵庫は故障。常温や冷凍での保存が効かない野菜は、送られてきた直後にしか使えない状態だった。

そうしたなかで小幡さんは着任早々、野菜だけ別の方法で調達することをCPに提案した。オバラウ島には2つの食料品店があった。1つは首都で仕入れた農産物も扱っている店で、もう1つはオバラウ島の農産物だけを扱っている店だった。小幡さんは「地産地消」が理想だと考えたが、前者の店ではオバラウ島では作られていないにんじんやセロリ、りんご、オレンジなど輸入品の野菜や果物が扱われており、かつ商品の仕入れも安定していたことから、両方の店を野菜の調達先にしてはどうかと提案した。賛同したCPはすぐさま上司にあたる地域統括者の栄養士に打診。すると、調達方法の変更は難なく認められ、週に1回のペースで両方の店から野菜を購入できることとなった。きゅうりやなす、トマトなどの野菜を食材に加えることが可能となったことから、小幡さんはそうした食材を使った献立のアイデアを、CPと共に逐次提案していった。

楽しんでもらえる栄養教育へ

病院給食の改善が一段落した任期半ばごろから、小幡さんは栄養教育の支援に力を入れるようになった。CPが行う栄養教育には2種類あった。1つは、医師が必要だと判断した生活習慣病患者などに対して行う個別栄養教育。もう1つは、院内で患者を集めて行う、あるいは住民の健康診断を目的に配属先の各種医療職が地域や学校を訪問する際などに行う集団栄養教育である。

当初、CPが行う個別栄養教育に同席して小幡さんが感じた問題は、「●●は塩分が多いので食べてはいけない」など、「やってはいけないこと」を一方的に伝えるだけになっていたことだ。それまで楽しめていた食事に制限を加えるのは「苦痛」である。食事に関して行動変容を促すためには、どのような食事改善ならば無理なく実践できるのかを相手と共に見つけ出していかなければならない。「血糖値を上げる食材を好む糖尿病患者に対して、そうした食材の摂取を止めさせるのではなく、量や頻度を考えてもらったり、血糖値を下げる食材の摂取を勧めたりする」といった具合だ。こうした栄養教育をするためには、食事に関する相手の考えに耳を傾けることが必要だが、CPにはそのステップが欠けていた。

そこで小幡さんは、自身が単独で個別栄養教育を行う際に患者の考えに耳を傾けることを実践し、個別栄養教育の記録簿に患者とのやりとりを具体的に記載することにした。記録簿はCPも記載するものであり、目にとまることが期待できた。CPの個別栄養教育での物腰が変わり、対象の患者が話しやすくなってきたと感じられるようになったのは、それから半年ほど経ったころである。

一方の集団栄養教育でCPのやり方に見られた課題も、やはり「一方通行」の講習になってしまっている点だった。どの受講者にも役立つような一般的な情報だけを扱わざるを得ない集団栄養教育では、受講者に「楽しい」と思ってもらい、伝えようとする情報を「自分事」と感じてもらうことが重要である。それをCPに知ってもらうため、小幡さんはCPと共に行う集団栄養教育で自ら「参加型」のアクティビティを実践し、そこでの受講者の反応をCPに直に見てもらうことにした。

例えば、院内で行った生活習慣病患者への集団栄養教育では、向こう1カ月間の行動目標を紙に書いて栄養改善の実現可能な方法を考えてもらうアクティビティを行った。また、地域で行った集団栄養教育では、塩分を抑えているけれどもおいしい乳幼児向けお菓子の試食会などを導入した。するとようやく任期の終盤、集団栄養教育の内容を検討する際にCPが「楽しませよう」という言葉をしきりに口にするようになった。Ⓒ

❶小幡さんが着任した当初の病院給食の例。「主食のキャッサバと、缶詰の魚を使ったスープ」など、野菜の少なさが顕著だった
❷食材調達の方法を変更して野菜や果物の量が増えた後の病院給食の例
❸地域で行った集団栄養教育で導入した、塩分が少ない乳幼児向け菓子の試食会。右端が小幡さんのCP
❹健康診断のための学校巡回の機会に集団栄養教育を行う小幡さん。カードを使って3つの食品群について学ぶ「参加型」のアクティビティを取り入れた

OPINION

「保健・医療」と「流通」の深い関係 ～協力隊員がとるべきアプローチとは？～

地域の財産に目を向ける

地域での栄養教育において、地元の食材を使う「地産地消」を勧めることは、住民の「食」に対する意識や関心を高めることができるという点でも大切なことだと思います。私の任地では、輸入品の清涼飲料水やインスタント麺、あるいはパンの消費が多かったのですが、私は栄養教育を行う際、地元で採れるココナツのジュースが清涼飲料水よりミネラルが豊富であること、地元で採れるタロイモやパンノキが、パンより食物繊維が豊富であることなどを伝えるよう努めました。地元に対する誇りが高い任地の方々には、そうした自尊心をくすぐるアプローチが有効ではないかと考えたからです。

CASE 4

理学療法士
ウズベキスタン

富田睦美（とみた むつみ）さんの事例
（ウズベキスタン・理学療法士・2017年度3次隊）

PROFILE
1989年生まれ、福岡県出身。専門学校で理学療法士の資格を取得した後、理学療法士として病院に5年半勤務。2018年1月、青年海外協力隊員としてウズベキスタンに赴任。20年1月に帰国。

協力隊活動
国立障害者リハビリテーションセンター（タシケント市）に配属され、リハビリに関する主に以下の活動に従事。
- 患者の治療
- 同僚への技術指導
- 運動療法のマニュアルの作成

専門教育を受けていない同僚たちに実践可能な技術を伝達

身体障害者への医療サービスの提供を専門とする医療機関に配属された富田さん。リハビリの十分な専門教育を受けていない看護師たちがそれを担当していたなか、「リスク管理」など優先して身につけるべき技術を伝達した。

富田さんが配属された国立障害者リハビリテーションセンターは、身体障害者への医療サービスの提供を専門とする医療機関。首都に2つの施設を有しており、疾患の内容や重さによって対応する患者を分担していた。病床数は約200床と約100床。ウズベキスタンではリハビリ従事者の専門教育を行うシステムがなく、配属先では1～3カ月の研修を受けただけの看護師がリハビリにあたっていた。そのため、彼らの技術の底上げが課題となっていたなか、富田さんは両方の施設でリハビリに従事する同僚たちへの技術支援に取り組んだ。

リスク管理の指導

配属先では、リハビリが必要な患者かどうかの判断を医師が下し、リハビリ科にその実施を指示するシステムになっていた。この点は日本の医療現場と同じだ。しかし、日本では「おおまかにどのようなリハビリをするか」「その際にどのようなリスクに配慮するか」を含めて指示が出されるが、配属先で医師からリハビリ科に伝えられるのは、疾患の名称とリハビリの必要性だけだった。十分な専門教育を受けていない同僚たちにとって、個々の患者の症状に合ったリハビリの内容を考えることや、リハビリを実施する際に患者の患部を悪化させないためにどのようなリスクに配慮すべきかを判断することは難しい。そのため、富田さんの着任当時、疾患ごとのマニュアルに沿った治療が機能障害の違いなどにかかわらず行われており、そのやり方はリスクが高いものとなっていた。

そうしたなかで富田さんは、「リスク管理」については主に関節の動かし方や筋のほぐし方に関する課題の解決に力を入れた。着任当時に同僚たちが行っていた治療は、「圧力」が過度にならないよう配慮されていないものだった。手の平で押すべきところを指で押したり、硬くなった関節を骨折のおそれを感じるほどの強さで曲げたりしていたのだ。そうした治療で患者が痛みを感じたら危険信号だが、同僚たちは患者が痛みを感じているかどうかには意識を向けていなかった。

リスクに配慮した治療の要領を同僚たちにつかんでもらうために富田さんがとった方法は、富田さんが彼らに治療を行い、患者の立場を体験してもらうというもの。富田さんは、昼休みなどを利用して彼らに腰痛解消などの治療を提供。「この触り方は痛くない?」「この触り方とこの触り方だったらどちらが気持ち良い?」などとコミュニケーションをとりながら、患者が受ける感覚に応じて強さなどを加減していく治療を体感してもらった。

効果は顕著だった。治療や筋力トレーニングをする際に、患者に「痛くない?」と声をかけたり、「私の治療のやり方が適切かどうかちょっと見てほしい」と依頼してきたりする同僚が現れたのだ。

「患者の生活環境」への目配り

個々の患者の機能障害に応じてアレンジするリハビリがなされていないという問題については、リハビリの十分な専門教育を受けない限りその実践は難しいと感じられたことから、富田さんは解決に向けたアプローチは断念。しかし、個々の患者の「生活」に応じたリハビリを行うことなら同僚たちにも可能だと考え、その実践に向けた働きかけを行った。

配属先は、キャパシティの問題からリハビリの対象者を入院患者に限り、さらに入院期間は10日間までとしていた。そのわずかな期間のリハビリで、退院後の自宅での生活に不自由がないようにすることはきわめて難しい。そのため配属先のリハビリ科にとって重要だったのは、自宅の構造など退院後の患者の生活環境を踏まえたうえで、そこでの生活で必要となる身体能力の獲得を最優先の目標としてリハビリを行うこと、およびそうした身体能力の獲得に向けて退院後に家族のサポートを受けるなどしながら続けるべき自主トレの方法を患者に伝えることの2点だった。

退院後の生活を視野に入れたリハビリの重要性について富田さんは当初、言葉で同僚たちに説明しようと試みた。しかしそれでは伝わりにくいと感じたことから、自らそうしたリハビリを実践し、その効果を見てもらおうと考えた。

自分がリハビリを担当する患者に対し、自宅のつくりや生活スタイルなどについて質問し、「それならば、入院中はこうしたリハビリを行いましょう」と提案。実践する際は、極力周りにいる同僚たちに聞こえるような声で話すよう留意した。そのうえで、たとえば自宅では椅子ではなく床に座って生活しているという片麻痺の患者に対しては、床からの立ち座りの訓練を重点的に行い、さらにその能力を伸ばすために自宅でできる訓練のやり方をまとめた資料を家族に渡すなどした。すると、そうした対応をした患者がしばらく経って来院したときに、退院時よりも身体能力が上がっているケースが出てきた。

それを横目で見てきた同僚たちが、富田さんが求めずとも患者にまずは退院後の生活環境について尋ねるようになったのは、任期終了まであと3カ月ほどとなった時期だった。

❶脊髄損傷患者に対して歩行訓練を行う富田さん
❷関節の可動域を広げるリハビリを行う同僚
❸❹運動療法で必要な器具が不足していたことから、富田さんは手づくりの器具を発案・紹介した。写真はいずれも、下肢麻痺の患者が歩行訓練をする際につま先が垂れて歩きづらくなるのを防ぐために施した装備
❺リハビリ用の器具を使って自主訓練に取り組む患者たち。配属先には援助によりさまざまな器具があった

OPINION

「保健・医療」と「生活」の深い関係
～協力隊員がとるべきアプローチとは？～

患者の生活に目を向けるきっかけづくりを

体のある部位の機能が失われている場合、その回復に長い時間がかかったり、回復がそもそも不可能であったりすることも少なくありません。そのためリハビリでは、障害がある部位の機能回復ばかりを目指すのではなく、ほかの部位の機能強化を図り、患者さんがそれぞれの置かれた環境で不自由なく生活できることを目指すべきですが、協力隊員が派遣される国々ではまだそうした考えが医療現場に浸透していないことも多いかと思います。現地の患者さんたちの生活環境は、協力隊員よりも配属先の人たちのほうがよく知っているはずです。協力隊員の立場でできるのは、患者さんの生活に目を向けるきっかけづくりではないかと思いました。

“失敗”から学ぶ #194

教員の多様性への理解が遅れ、全教員への指導が未完に

話＝村田良太（むらたりょうた）さん（ボリビア・小学校教育・2018年度1次隊）

私は児童数約300人の小学校に配属された。配属先で私が課題だと感じたことの1つは、授業で児童に思考させたり発言させたりする時間をとらず、自分が話をするか、練習問題を解かせるかに終始する教員がいたことだ。校長には「教員間の指導力の差をなくしたい」という意向があった。私も、まだ授業を上手にできない教員も、やり方さえわかればできるようになると考えた。そこで着任してまもなくから、主にワークショップによって授業の技術を伝えることにした。また、現地の教員と共に指導案を作成して、ほかの教員の前で授業を行ってもらい、事後にその教員と校長、私の3人で振り返りをする校内研修も進めた。

振り返りの場で私が「こういう方法もある」と提案をすると、多くの教員が「ありがとう。新たなアイデアね」と言ってくれた一方、当初から2人の教員は「あなたは私たちへのリスペクトがない」と反発してきた。その2人こそ、授業改善に取り組んでもらいたい教員だった。このままでは教員間の指導力の差が開いてしまうと思ったが、それを防ぐためにどうすれば良いのか、策はなかなか見つからなかった。

状況打開のきっかけが訪れたのは、着任の約半年後だ。「リスペクトがない」と反発した教員の雑務を手伝ったところ、にわかに私に心を開いてくれるようになった。ボリビアの人たちとの付き合いではパーソナルなかかわりが重要なのだと気づき、以後、他愛もない会話などでも同僚たちとかかわる時間を持つよう努め、さらに彼らの良い点を多く伝えるようにした。すると明らかに関係性が好転。それまで気づかなかった彼らの性格や家庭の事情などの多様性が見えてきた。

そこで着任の約1年後から、同僚たちに一律のゴールを求めるのではなく、それぞれに合ったゴールを設定し、その達成に向けた支援を行うことにした。児童に思考させたり発言させたりする授業が実践できない教員に対しては、まずは教職の楽しさを知ってもらうため、授業で計算練習を継続的に行うことで、児童の基礎学力が伸びる喜びを実感してもらった。すると、そうした教員たちの授業への積極性が向上。最後はすべての同僚と良い関係性でかかわることができたのは良かったが、さらなる変化の後押しができない教員がいるまま時間切れになってしまったことは残念だった。

他校の教員をオブザーバーとして招いて配属先で実施した研修の振り返りの様子

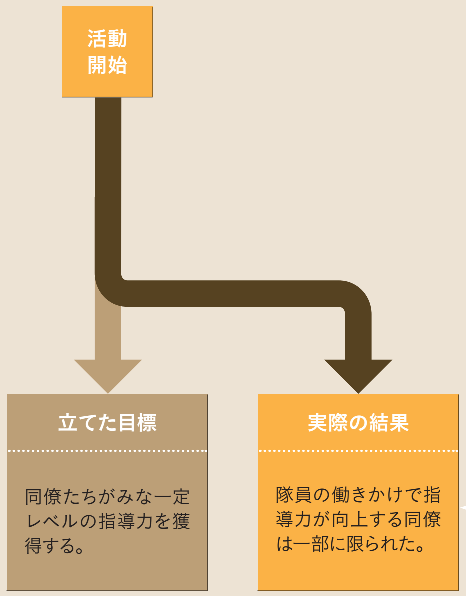
PROFILE

1987年生まれ、鹿児島県出身。大学で中・高等学校の教員免許状（社会科）を、通信制大学で小学校の教員免許状を取得。教員として公立小学校に約9年間勤務した後、2018年6月、青年海外協力隊員としてボリビアに赴任（現職教員特別参加制度）。20年3月に帰国し、復職。

活動概要

グアテマラ小学校（ラパス県ラパス市）に配属され、配属先や他校の教員を対象とする研修やワークショップの開催などに従事。

事例整理



【本事例の状況（SWOT分析）】

	促進要因	阻害要因
内部	【隊員側の強み（S）】すべての同僚に公平にかかわろうという意思があった	【隊員側の弱み（W）】同僚たちの間の違いについての認識が遅れた
外部	【活動環境の強み（O）】校長は教員たちの指導力向上への意欲が強かった	【活動環境の弱み（T）】教員によって意欲と力量に大きな差があった

隊員自身の振り返り

反省点の中でもっとも大きいのは、もっと心に余裕を持っていれば良かったということです。同僚やJICAの企画調査員（ボランティア事業）、他の隊員からの助言などによって徐々に自分の課題に気付くことができましたが、心に余裕があれば、早くから同僚たちとのパーソナルなかかわりを重視して彼ら1人1人の良さや個性に気づき、すべての同僚ともっと違うかかわり方ができただろうと思います。また、私は日本で年上の教員を指導した経験がなかったなか、配属先の校長から早い時期にさまざまなリクエストをされたことから焦りが生じ、パーソナルなかかわりを当初は軽視してしまったのだろうと感じます。この貴重な経験を、今後の自分のキャリアの中で生かしていこうと思っています。

他隊員の分析

長期的視野に立った活動を

私は広く市内の教員を対象とする授業研究の実施に取り組みましたが、やはり教員間の意欲や力量、彼らを取り巻く環境がそれぞれ大きく異なっていました。そうした状況のなか、2年間で彼らの技能を底上げすることは、とても難しいと思います。私も現地教員にこちらの意図を理解してもらえず、衝突してしまったこともあります。そうした経験を通じて私が感じたのは、任期中に明確な結果を出そうと焦ることなく、長い目で見て対象教員たちに有益な働きかけをすべきだろうということです。焦らなければ、1人1人の教員と親身に向き合い、長期的な視野に立った最善のアドバイスを模索することができるからです。

文＝協力隊経験者
●中南米・小学校教育・2014年度派遣
●活動概要：市の教育行政機関に配属され、小学校を巡回して算数授業の質向上支援に従事。

「待つこと」も1つの手

多くの教員の授業への積極性が向上した点は、とても重要な変化だと思います。「指導対象者の間の差をなくす」ということは、私も家畜飼育の技術を指導する活動のなかで難しいことだと感じました。私は技術向上の意欲がない農家を、巡回指導の対象から一時除外したことがありました。それから半年ほど経ち、巡回指導を続けていた農家が新たな餌のつくり方をマスターし、牛の成長具合に変化が出てきたのをどこからか知ったのか、巡回指導を止めた農家が連絡をしてきて指導を求めるようになりました。「待って様子をうかがうこと」が相手によっては有効なのだと、そのときに感じました。

文＝協力隊経験者
●中南米・家畜飼育・2018年度派遣
●活動概要：県の農業行政機関に配属され、小規模酪農家への技術支援に従事。

希少職種図鑑

#D261

食品加工

派遣中	0人
累計	192人
分類	鉱工業
活動例	生産工程の分析と改善指導、新製品の開発支援
類似職種	農産物加工、水産物加工、畜産・乳製品加工

※人数は2021年7月末現在。

配属先の同僚たちと森田さん(右から4人目)

PROFILE

1986年生まれ、和歌山県出身。県の行政獣医師として食品衛生と動物愛護を担当した後、2017年7月、青年海外協力隊員としてフィリピンに赴任(現職参加)。19年3月に帰国し、復職。

活動概要

フィリピン貿易産業省のカピス州事務所(ロハス市)に配属され、主に以下の活動に従事。
- ●中小規模の食品製造業者を対象とする、食品衛生の管理に関する指導
- ●食品衛生が関連する営業許可の取得に向けた食品製造業者への助言

話

森田 翠(もりた みどり)さん
(フィリピン・2017年度1次隊)

Q メインの活動は?

配属されたのは、企業の支援などを行うフィリピン貿易産業省の地方出先機関で、所属は食品製造業への支援などを行う産業振興課でした。任期中に特に力を入れて取り組んだのは、フィリピン保健省食品薬品局が食品衛生の管理状況などを審査して食品製造業者などに出す営業許可(LTO)の取得を支援することです。

食品製造業者に対するLTO取得の支援は産業振興課の所掌業務でしたが、着任当時、課にはその取得手続きに詳しいスタッフがいませんでした。そこで私は着任するとまず、半年間ほどかけて管轄地域の食品製造業者を回り、食品衛生に関するセミナーを実施するなどして各業者の食品衛生に関する情報を集めました。その後、カウンターパート(以下、CP)や同じ島に住む食品加工隊員と共に、食品衛生に関するガイドブックを作成しました。その内容は、LTO取得のために満たす必要がある食品薬品局の「適正製造規範(GMP)」や、取得の申請に必要な書類などの解説が中心で、イラストやマンガを用いてできる限りわかりやすいものになるよう心がけました。約1年間をかけて完成させたガイドブックは、管轄地域の食品製造業者や貿易産業省の各地方出先機関に配布したほか、その内容を解説するセミナーも食品製造業者を対象に実施しました。

Q 活動での最大の困難は?

ガイドブックは私たち協力隊員が原稿を書き、CPに英語の表現を中心にチェックしてもらうという手順で作成したのですが、多忙なCPにチェックの時間をとってもらうのが容易ではありませんでした。

Q どう対応しましたか?

CPがオフィスで通常の業務を行っている間は、ガイドブックのために時間をとってもらえる余地がほとんどなかったため、CPの出張について行ってその行き帰りなどの隙間時間にチェックしてもらう、あるいはプライベートで一緒に過ごす時間を増やしてそこでチェックしてもらうなどして、完成に漕ぎ着けることができました。

Q 同職種の後輩隊員にメッセージをお願いします。

「食品加工」は専門的な知識や技術が必要となる職種ではありますが、立てた活動目標を達成するためには、専門性を超えた力、特に周囲の人の協力を取り付ける力などが重要になるはずです。「自分の専門性を発揮しよう」と1人でがんばってしまうのではなく、時には助言を求めたり、手伝ってもらったりすることで、周囲の人たちと良い関係が生まれ、活動もスムーズに進むと思います。 C

#H111

鍼灸マッサージ師

派遣中	0人
累計	57人
分類	保健・医療
活動例	あん摩・マッサージ・指圧の実技指導や患者への応対の教育
類似職種	—

※人数は2021年7月末現在。

配属先で生徒に指圧の指導を行う両角さん

PROFILE

1982年生まれ、長野県出身。長生学園あん摩マッサージ指圧師科を卒業後、あん摩マッサージ指圧師の国家資格を取得。整体院と整形外科内科医院に勤務した後、2017年10月、青年海外協力隊員としてケニアに赴任。19年10月に帰国。

活動概要

シクリ視覚・聴覚障害者技術訓練専門学校(ホマベイ・カウンティ)に配属され、主に以下の活動に従事。
- ●指圧の理論・実技の指導
- ●指圧の理論・実技の教科書の作成
- ●指圧の指導者の育成
- ●配属先外での指圧の広報

話

両角大智(もろずみだいち)さん
(ケニア・2017年度2次隊)

Q メインの活動は?

配属されたのは視覚障害者と聴覚障害者が通う専門学校です。主な活動は、視覚障害者を対象とする1年間の指圧コースで理論や実技を教えることでした。任期の1年目は4人、2年目は6人の生徒がコースに在籍していました。配属先には指圧の教科書がなかったため、英語で原稿を執筆し、点字翻訳者や生徒の協力を得て英語の点字の教科書も作成しました。指導した生徒たちの一部は、その後、自宅で開業したり、スポーツジムのマッサージルームに就職したりして、指圧師として働いています。

Q 活動での最大の困難は?

生徒たちを指導することには大きな困難はありませんでしたが、私が帰国した後に指圧コースで教員を務める人をどう確保するかという課題の解決には苦労しました。私の赴任当時、コースに現地教員はおらず、任期の半ばを過ぎても後任隊員が確保できるめどが立っていませんでした。何か手を打たなければ私の帰国と同時にコースは閉鎖せざるを得ないという状況のなか、配属先の校長たちとこの問題について話し合い、ほかのコースの教員を異動させるか、新たな教員を配置するべきだと提案しましたが、適任者の確保は容易ではない様子でした。

Q どう対応しましたか?

コースで学んでいた生徒の1人(以下、Aさん)に同意を得たうえで、彼を卒業後に教員として採用することを校長に提案しました。任期の残りが半年ほどとなったころ、校長はAさんの力量次第で採用すると決断してくださり、その後3カ月間、指圧の理論や技術だけでなく、その指導方法も伝授していきました。そうして無事に採用が決まり、現在もAさんが教員となって配属先の指圧コースは継続されています。

Q 同職種の後輩隊員にメッセージをお願いします。

人と人が触れ合って癒す日本の指圧技術は、ケニアの人々にも好評でした。私は教え子のすべてを無事に卒業させ、指圧師として自立させることはできませんでしたが、卒業した教え子たちが患者さんに、あるいは身近な人に指圧を行い、喜んでもらっている様子を見るたびに、やりがいを感じました。同じ「鍼灸マッサージ師」という職種であっても、どこに達成目標を置くべきかは、隊員自身の指導力、教え子の適性、配属先の仕組みなどさまざまな要素に応じて異なってくると思います。試行錯誤しながら自分の状況でもっとも適切な達成目標を見つけ出し、健康に気をつけながらその達成に向けた活動を楽しんでください。 C

JICA海外協力隊的プチテクガイド

第119回

簡単＆便利！　活動・生活のパワーアップに役立つ

＼ 活動に役立つアイデア ／

マーケティング入門②

ナビゲーター＝東野奈津恵さん
（エルサルバドル・経済・市場調査・2008年度4次隊）

商品を売れるようにするため、その価値をいかに高めるかを考える活動全般を指す「マーケティング」。前回に引き続いて、手軽に実践でき、かつ協力隊員の活動現場で実践が容易な方法をご紹介します。

パッケージやラベルのデザイン

前回、機能や品質の面の価値である「機能的価値」と、商品を利用した消費者に引き起こす感情の面の価値である「情緒的価値」を考えて商品を開発すべきということをご説明しました。そうして開発した商品が持つ価値が正確にわかりやすく消費者に伝わるようにすることは、「必要としている消費者に商品が届きやすい」という価値を高めるものであり、マーケティングの作業です。収入向上を目的に、アクセサリーなどの雑貨、石鹸、農産加工品などの開発・生産・販売を支援する場合、パッケージやラベルなどをどのようなデザインにするかは工夫のしどころですが、それらは商品が持つ価値を伝える手段の1つです。商品が持つ価値が伝わるようなデザインにするには、以下の2つのステップを踏む方法が容易であり、お勧めです。

❶テイストの方向性を決める

「テイスト」とは、商品を見たときの、あるいは商品を手に取ったときの消費者の感じ方です。商品が持つ価値をパッケージやラベルなどによって伝えるためには、価値を表現できるような感性的なイメージを見つけ出してテイストの方向性とし、パッケージやラベルなどのデザインの基盤とします。たとえば、海辺の漁師町の女性グループがつくる手工芸品を、「海辺の町」という生産地域の特性を情緒的価値としてアピールする場合、「海らしさ」というイメージをテイストの方向性に設定します。あるいは、「栄養価が高い」という機能的価値をアピールして食品を売る場合、「健康的」というイメージをテイストの方向性に設定します。

協力隊員が生産者たちとテイストの方向性を議論するうえで、「元気」「やさしい」「ワイルド」「繊細」「雄大」など感性的なイメージを表現する言葉を多く知っておくことが有益なので、そうした語彙を増やすための勉強には力を入れてください。

❷トーンの方向性を決める

「色」「素材」「書体」など、デザインを左右するさまざまな要素のあり方が「トーン」です。テイストの方向性を決めたら、それをパッケージやラベルなどのデザインに反映させるため、トーンの方向性を決めていきます。たとえば、手染め・手織の布の製品を「手づくり」という情緒的価値をアピールして売る場合に、テイストの方向性を「素朴」と決めたら、「タグには和紙のような素材の紙や、手書き風の書体を使う」といったようにトーンの方向性を決めていきます。

テイストやトーンの方向性を決めたら、それにもとづいて商品からチラシなどの販促物までデザインを一気通貫させることで、ブランド力が高まり、商品の認知度の向上につながります。

販路の開拓

前述のとおり、必要としている消費者に商品が届きやすくすることはマーケティングの作業ですが、開発した商品を必要とする消費者がどのような店によく立ち寄るのかを探り当てるのは容易ではありません。そのため、収入向上支援に取り組む協力隊員にとって、販路をどのように広げていくかは、難しい課題の1つになっているかと思います。

開発した商品を必要とする消費者がよく立ち寄る店を探す方法としてお勧めなのは、開発した商品を絶えずかばんに入れて持ち歩いたり、アクセサリーや衣類ならば絶えず身につけたりして、人目に触れる機会を増やすことです。商店で買い物をする際、レジで支払いをするときに店員にさりげなく自分が持ち歩いている商品が見えるようにすると、「それは何？」などと興味を持ってくれることがあるはずです。そこで、「実は、こういう人たちがつくっているこういう商品です」などと説明すれば、「それならば、この店に置いたら買っていく客がいると思う」などと話が進むかもしれません。あらたまって卸先を開拓するために営業活動をするとなると、協力隊員にとっても生産者にとっても重荷になって頓挫する可能性がありますが、「絶えずかばんに入れておく」といった方法なら無理なく実践できると思います。

＼ 生活に役立つ技 ／

「香り」で心を癒す

ナビゲーター＝長壁早也花さん
（ラオス・青少年活動・2015年度2次隊）

香りの正体は揮発性がある低分子化合物ですが、嗅覚がこれをキャッチすると、その情報はまず脳のなかの知覚などをつかさどる「大脳皮質」に伝わり、「何の香りであるか」が認識されます。同時に、香りの情報は感情などをつかさどる「大脳辺縁系」や自律神経などをつかさどる「視床下部」にも伝わり、人の心にも影響を与えます。たとえば、ラベンダーに含まれる香気成分（揮発すると香りとなる成分）である酢酸リナリルによって、心の安定につながる神経伝達物質の分泌が大脳辺縁系で進むと言われています。香りのそうした働きを活用するため、人間は古来、物に含まれる香気成分を人工的に抽出することをしてきました。植物に含まれる香気成分を抽出した「エッセンシャルオイル」などがその例です。

異文化社会での生活にはストレスが付き物です。そこでここでは、任地で手に入る花やハーブなどを使って手軽に香りを自作して楽しむ方法をご紹介します。

アルコールで抽出する「チンキ」

香気成分には水溶性のものと脂溶性のものがあります。いずれもアルコールには溶け出しやすく、そうした性質を生かして植物の香気成分を抽出した液体は「チンキ」と呼ばれます。以下のように手軽につくれるので、香気成分を自力で抽出する方法としてお勧めです。使う植物は良い香りがする花やハーブなら何でも構いませんが、ルームスプレーに使う場合は、ローズマリー、カモミール、ラベンダー、カレンデュラ、ハイビスカスなどの花や、レモングラス、ローリエ、タイムなどのハーブが向いていると思います。

【つくり方】

❶材料とする花やハーブを洗い、水気を切る。

❷❶を瓶などに入れてアルコールを注ぎ、2週間ほど置く。350ミリリットルのアルコールに対し、花ならば10輪ほど入れれば十分な香りが出ます。

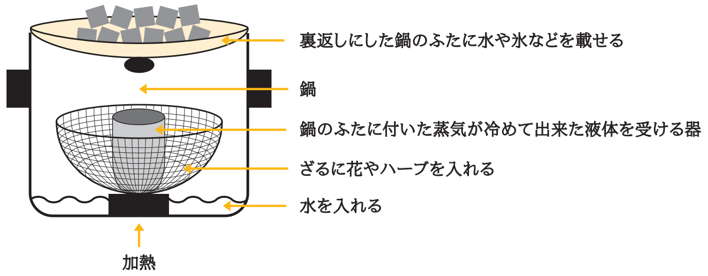
❸ルームスプレーに使う場合は、スプレーボトルに入れた水に少量のチンキを足せば適度な濃度になります。

香りを立てた足湯

派遣中、水浴びやお湯浴び、シャワーだけで過ごす協力隊員が大半かと思います。そうした生活のなか、「お風呂」の代わりとして手軽に楽しめる癒しの方法は「足湯」です。脂溶性の香気成分も湯で温められて揮発すれば香りとして嗅ぐことができるので、足湯をする際に湯に花やハーブを入れれば、湯による足からの癒しと鼻からの香りの癒しを同時に楽しむことができます。日本でも、スパなどをする際には最初にエッセンシャルオイルを垂らした湯で足湯をしてから始めるのが通例です。どのような香気成分を持つ花やハーブでも足湯の香りづけにできますが、レモンやグレープフルーツなどの柑橘類を使えば、日本で柚子湯に浸かっているさわやかさを楽しむことができます。

香気成分を含む液体を蒸留して取り出す

エッセンシャルオイルは、花やハーブを蒸して香気成分が溶け出した油脂と水を蒸留し、そこから油脂だけを分離することで得られます。しかし、そうして蒸留した液体に含まれる油脂の割合はわずかであるため、エッセンシャルオイルを得るためには大量の花やハーブを使わなければなりません。しかし、少量の花やハーブを蒸して蒸留した液体にも、水溶性の香気成分とわずかな量の脂溶性香気成分が含まれているため、やはりルームスプレーなどで使うことができます。身近な道具を使って花やハーブを蒸し、香気成分が含まれる液体を蒸留するには、下の図のような方法があります。裏返しにしたふたに付いた蒸気を冷まし、下の器に滴らせる方法です。



投稿募集！

活動や生活に役立つちょっとしたテクニックを
お持ちの方は、『クロスロード』編集室まで。
✉crossroads@sojocv.or.jp

JICA Volunteers'
before ▸ after 人生を変えた2年間

before
商社の社員

↓

after
企業組合の職員

とちぎ農業ネットワーク企業組合の事務所にて

「農」による地域づくり

ドミニカ共和国・コミュニティ開発・2017年度1次隊
穂積翔太（ほづみしょうた）さん

商社に7年間勤務してビジネスのノウハウを身につけた後、協力隊に参加した穂積さん。カカオを使った農産加工品の商品開発に携わったことが転機となり、帰国後は、地域の農産物の魅力を発信する団体に就職した。

「ゼロ」からつくる楽しさ

実家が兼業農家だったため、子どものころから「農」には馴染みが深かった。同時に、地元にオーストラリア人の家族が住んでいたため、子どものころから「海外」への興味も持っていた。「農」と「海外」に関する研究ができることから進学先に選んだのは、明治大学農学部。国際開発経済論を専攻した。ゼミの研究の一環で中華人民共和国福建省を訪れ、日本に輸出される生姜が生産されている現場を見たことで、生産と消費が遠く離れた地で行われるビジネスのダイナミズムに興味を抱いた。

卒業後に就職したのは商社。ビジネスのノウハウを勉強したいという思いから選んだ就職先である。担当したのは、エネルギーや自動車に関する商材の営業。入社する時点で、20代はビジネスのノウハウを身につけ、30歳までには海外でのビジネスに就くというビジョンを持っており、海外でのビジネスに就くステップにしようと考えたのが協力隊だ。応募は29歳のとき。商社を退職し、ドミニカ共和国に派遣された。

配属されたのは、環境保護に取り組むNGO。要請内容は、森林保護のために植えられたカカオを活用して住民の収入を向上させる策を考え、実践することだった。穂積さんが着目したのは、従来現地で行われていたカカオの販売方法。生のカカオをバケツに入れ、重量によって決まる金額で売っていたが、利益率は低かった。穂積さんは、カカオを発酵・乾燥させた後に焙煎してパウダーに加工し、販売することを提案。女性の生産者グループが設立され、高速道路の休憩所など「道の駅」のような場所で製品を販売するようになった。その後、グループは法人格を取得するまでに成長。このように「ゼロ」からビジネスを生み出し、地域の様相に変化をもたらすことは、日本の商社での仕事では経験できなかったことであり、やりがいを強く感じた。

協力隊経験で体得した関係づくり

穂積さんが協力隊活動を通じて感じたのは、食は人間にとって不可欠であるため、「農」は決してなくならない産業であり、どの地域、どの時代にも重要な産業であり続けるはずだということだ。日本でも「農」は重要な産業だが、担い手不足という課題がある。協力隊時代に「農」にかかわり、それによって地域の様相が変わるというダイナミズムを体験した穂積さんは、その体験で学んだことを日本で生かすことができるのではないかと考えた。

そうして帰国後の再就職先に選んだのは、栃木県の農産物の魅力をPRしたり、それを使った農産加工品を開発・販売したりする「とちぎ農業ネットワーク企業組合」（以下、「組合」）だ。主な事業は、栃木県産の果物を使ったオリジナルの加工商品の開発・販売、栃木県の農家と農産物の仕入れが必要なホテルやレストランなどをつなぐコンサルティング、栃木県産の農産物のプロモーションなど。栃木県の農業に関心があるさまざまな業種の人がサポーターとなり、日々議論を重ね、栃木県の農業を盛り上げるための取り組みを行っている。

女性生産者グループとミーティングを行う協力隊時代の穂積さん

穂積さんが現在担っている役割は、農家とその農産物の顧客の間に入り、顧客のニーズに合った商品が提供されるよう促すことだ。たとえば、栃木県内の観光地の高級ホテルから「地産地消」のメニューを設けるために使う食材の注文がある場合、顧客から「品質や規格」など納める商品の要望を聞き、生産する農家に伝えるなどしている。

現在担当している仕事は、協力隊活動の延長にほかならないと穂積さんは感じている。「組合」は農家と農産物の消費者をつなぐ立場。両者のニーズを探り、両者にとって有益な自分の役割を見つけ出さなければならない。協力隊時代に穂積さんが取り組んだ活動も、カカオの生産者とその潜在的な消費者の両者のニーズを探り、つなぐことだ。隊員として赴任した当初は、現地の農家から「きみはいったい何者だ?」という目で見られたが、じっくりと時間を共有することを重ねていくうちに、「悪いやつではない」と信頼してもらえるようになった。そうした経験があるからこそ、現在の仕事でも、当初は邪険に対応されていた農家とも、持久戦で信頼関係を築くことができているという。

そうしたスタンスは、農家だけでなく、発注する企業の信頼の獲得にもつながっている。農産物の品質については、生産時の農薬の使い方などは買い手が探るのが難しい点も多い。そのため、農産物のビジネスで重要なのは、買い手と売り手の信頼関係だ。そんな信頼関係をスムーズに構築できるのは、協力隊経験があったからこそだと、穂積さんは感じている。 C

【穂積さんのプロフィール】

before		JICA Volunteer		after
1987	2010	2017	2019	2020
福島県出身	3月、明治大学農学部を卒業 4月、商社に入社	**7月、青年海外協力隊員としてドミニカ共和国に赴任**	7月、帰国	**4月、とちぎ農業ネットワーク企業組合に入職**

30歳までに海外で仕事をするというビジョン叶えるため、協力隊に参加した。

「食と農」で地域活性化につなげたいとの思いで選んだ就職先だった。

とちぎ農業ネットワーク企業組合

設立：2015年
事業内容：栃木県産農産物の販路開拓、販売促進、加工商品開発
ウェブサイト：

帰国後 よもやま話

第29回 青少年活動隊員篇

「日本社会への復帰」や「進路開拓」、「協力隊経験の生かし方」など、協力隊員の「帰国後」について、OB・OGに語り合ってもらいます。

［座談会参加者］

Aさん（女性）
【派遣前】
児童養護施設の職員
【協力隊】
▶退職参加
▶・青少年活動
・アフリカ
・2015 年度派遣
▶児童保護施設で生活や学習の支援などに従事
【現在】
日本語初期指導教室の指導員

Bさん（女性）
【派遣前】
中学校教諭（英語科）
【協力隊】
▶現職参加
▶・青少年活動
・アジア
・2016 年度派遣
▶女性保護施設でアクティビティの支援などに従事
【現在】
中学校教諭（英語科）＝復職

Cさん（女性）
【派遣前】
学校の事務職員
【協力隊】
▶現職参加
▶・青少年活動
・アフリカ
・2016 年度派遣
▶小学校で体育授業の支援などに従事
【現在】
学校の事務職員＝復職

A 大学で中学校と高校の保健体育科の教員免許状を取得した後、児童養護施設で働いてから退職して協力隊に参加しました。協力隊時代は児童保護施設で生活や学習の支援などに携わりました。現在は、来日してまもない外国籍の子どもたちに日本の学校生活で必要となる日本語や日本文化などを教える「日本語初期指導教室」で指導員を務めています。勤務のかたわら、小学校の教員免許状を取るために通信制の大学で学んでもいます。

B 大学で中学校と高校の英語科の教員免許状を取得した後、中学校で英語科教員として勤務してから協力隊に現職参加しました。協力隊時代の配属先は10代の女性が入所している保護施設で、主にアクティビティの支援などに携わりました。帰国後は派遣前と同じ中学校に復職し、現在に至ります。

C 私も大学で中学校と高校の英語科の教員免許状を取得しましたが、卒業後は、教科指導をすべて英語で行う「イマージョン教育」[*1]を実践する小中高一貫校で事務職員を務めていました。担当業務は、外国人教員たちのサポート全般です。協力隊は現職参加で、小学校の体育授業の支援などに取り組みました。帰国後は復職し、派遣前と同じ業務を担当しています。私もAさんと同様、小学校の教員免許状を取るために通信制の大学で学んでいます。

助け過ぎない

A 日本語初期指導教室を帰国後の進路に選んだのは、生活のどのような点に国による文化や習慣の違いがあるかを協力隊経験で知ったことから、日本で暮らす外国籍の子どもたちが文化や習慣の違いにとまどわずに済むためのサポートができるだろうと考えたからです。実際、「日本のトイレでは紙をゴミ箱に入れない」「日本ではスキンシップは少ない」など生活の細かな点について教えることで、子どもたちが恥ずかしい思いをして日本が嫌にならないようなサポートができています。

B 私は英語科教員なので、接する外国人というと同僚のALT[*2]なのですが、彼らのなかには、日本の生活になじめないために辞めて帰国してしまったり、休みがちになってしまったりする方もいらっしゃいます。つらさを感じたらSOSを出せば周囲が力になるとは思うのですが、人に負担をかけることは日本では避けたほうが良いのではないかなどと考え、SOSを出すのを遠慮しているという方もいらっしゃいます。私は協力隊員として異国の地で生活するなか、孤独を感じてつらくなるという経験をしているので、彼らの心が想像できます。そのため帰国後は、ALTに悩んでいる様子がうかがえたら声をかけたり、下の名前で呼び合うなどフランクな関係をつくってSOSを出しやすくすることを心がけています。

C 私の派遣国の方々は、私に積極的に話しかけ、こちらからSOSを出さなくても助けてくれたので、マイノリティーとしてのつらさをあまり感じることなく生活できました。そのため帰国後は、勤務校に勤める外国人教員に積極的に話しかけ、SOSを引き出そうとするようになりました。派遣前、自己主張してばかりいる外国人教員たちを「自己中心的な人たちだ」と思っていました。しかし、協力隊員として異文化社会で暮らすなか、自己主張することが日本ほど否定的に捉えられていない社会があるのだとわかったため、帰国後は彼らの自己主張への嫌悪感はなくなりました。それもあって、彼らのSOSを引き出す存在になろうと思えるようになりました。しかし、勤務校に勤める外国人教員は多く、皆をフォローするのは難しいというのが現実です。コロナ禍に入ってから自宅にいる時間が長くなり、孤独を深めて辞めてしまった外国人教員もいたのですが、その教員の悩みに私は気づくことができませんでした。

A 日本で暮らすすべての外国人に対し、周囲の日本人が絶えず「困っていることはありませんか？」と聞いてあげるというのは、現実的には難しいことだと思います。私が帰国後に教育実習を行った小学校は、1クラスに外国籍児童が3、4人いるような学校だったのですが、先生が話す日本語を理解していない外国籍児童が多かったものの、「わかったかな？」などとその都度尋ねるのは不可能だと感じました。そうした様子を見て私が思ったのは、日本で暮らす外国人のSOSを引き出してあげることよりも、SOSを自ら発信する力を付けてあげることのほうが大事だということです。そうして日本語初期指導教室では、「先生が言っていることがわからなかったので、もう一度言ってください」「助けてください」「忘れ物をしたので貸してください」といった「SOSを伝える日本語」を真っ先に教えるようになりました。この点は同僚の先生たちとも話し合い、教室全体で徹底しています。

C 「困っていることはありませんか？」と助けてばかりいたら、「困っています」と自分から発信する力が付かないけれども、何も助けなければ、相手は困った状態のままになってしまう。日本で暮らす外国人をどこまで助ければ良いのか、私は答えを見つけ出せずにいましたが、今のお話を聞いて、「困っています」と発信する力を身につけてもらうこと、つまり自分の助けがなくても相手がやっていけるようにすることこそ、あるべき支援の形だと思いました。これは、国際協力を含む社会のあらゆる助け合いに当てはまることだと思います。

B 助け過ぎもまったく助けないのもだめだという点は、「教育」にも通じることかもしれません。私は派遣前、自分のクラスに不登校の生徒がいたら、何としてでも学校に連れ出そうとするタイプでした。しかし協力隊経験がきっかけで、そのやり方は生徒の意思を尊重していないと気づき、生徒の社会につながる力を何も変えてはいなかったと考えるようになりました。協力隊時代、当初はアクティビティの準備や運営を私1人で必死にこなそうとしていたのですが、ある時期、私が手いっぱいなのを見かねて率先して準備をしてくれる子どもが出てきました。そのときに、「助け過ぎて子どもが力を発揮する機会を奪っていた。私には助け過ぎの傾向がある」と自覚しました。そうして今では不登校の生徒を無理に学校に連れ出すことはしなくなりました。しかし、やはり何も手助けをしなければ、その生徒の足が学校に向くきっかけが生まれないので、彼らの学校に来る力を引き出すため、「図書館であなたが好きそうなこういうタイトルの本を見つけたよ。借りるためだけでも学校に行ってみたら」などと言って、彼らが社会との接点を見つけ出す支援はするようにしています。

今後の目標

A 私は日本と派遣国で子どもを保護する施設に勤めるなか、ある程度自我が形成されている中学生以上の年代の子どもたちにあらためて学ぶ姿勢などを身につけさせるのは難しいと感じたことから、もっと早い時期の教育が重要だと考えるようになりました。それが小学校教員への転職を目指すようになった理由の1つです。当面の目標は小学校で働けるようになることですが、やはり派遣前に携わっていた福祉の分野にも興味があります。現在、日本でも里親制度が広がりつつあるので、私自身が家庭を持った後は、そうした形で子どもにかかわっていきたいとも考えています。

B 皆さんの話で日本語初期指導教室やイマージョン教育のことを知り、あらためて社会の変化と共に社会が教育に求めるものは変化しているのだと感じました。教員はかならずしもそうしたニーズの変化に対応することなく、毎年同じような授業を繰り返していても務まってしまう面があるのですが、皆さんが小学校の教員免許状を取ろうとされている話などを伺い、私も社会の変化を見ながら自分が果たすべき役割を考えていく教員でありたいと思いました。日本では現在、小学校での英語教育の拡充に力が入れられ、英語の授業だけを担当する専科教員が置かれるようになっています。「早い時期の教育が重要」というお話と重なりますが、小学校での英語教育のあり方はとても重要だとの考えから、私は小学校の英語専科教員になる方法も調べ始めています。今後はその道をさらに真剣に検討していこうと思いました。

C 私が小学校教員を目指すようになったのも、協力隊員として小学校で活動するなかで「早い時期の教育が重要」との考えが強まったからです。実は、私自身には小学生のときの先生に関する記憶がほとんどありません。一方、協力隊時代の教え子たちには、幼少期に日本人である私とかかわった記憶は残り続け、人生に何かしらの影響を与えるのではないかと思います。そういう役目を日本でも果たしたいと思い、小学校教員という進路を考えるようになりました。小学校教員となり、協力隊の経験を伝えるなどして「記憶に残る先生」になることが、当面の私の目標です。

*1 イマージョン教育…未習得の言語の教育方法の1つ。教科をその言語で学ぶことで身につけさせる。
*2 ALT…Assistant Language Teacher（外国語指導助手）の略。

Pick Up OB·OG会

「派遣国」や「職種」など、何かしらの共通項を持つ協力隊経験者によって構成するOB・OG会を、シリーズでご紹介していきます。

青年海外協力隊三重県OB会

会の目的

■協力隊経験者間の親睦を図る
■外国人住民との親睦や彼らへの協力を図る
■関係機関（JICA、JOCA、県、市町村など）が行う事業への参加などを通じて、国際交流や国際協力、地域社会の国際理解などに資する

主に三重県に縁があるJICA海外協力隊経験者で構成される当会が設立されたのは1975年。協力隊の説明会「協力隊ナビ」を月に1回のペースで開くなど、これまでは地域の人々に協力隊や国際協力について知ってもらうための活動に力を入れてきた。

近年、ブラジル人を中心とする外国人住民が県で増加しているのを受け、多文化共生社会づくりへの貢献に活動の軸足を置くようになっている。2019年6月には、外国人住民の子どもの教育のあり方について議論を交わす連続パネルトークを開始。これまでに開催した5回はいずれも、外国人住民、学校関係者、協力隊経験者などさまざまな立場の人がパネリストとなってそれぞれの経験や意見を発表した後、発表で出たテーマをめぐって全体セッションやグループセッションで参加者がディスカッションをするというプログラムとしてきた。コロナ禍に入ってからはオンラインで開催。毎回、県内外の50人ほどが参加している。第6回の開催は22年1月の予定だ。

「協力隊経験者は海外で外国人として暮らす経験を通じて、日本の文化や社会についての新たな気づきを獲得し、そのなかで困難に直面しながら暮らしている外国人の力になりたいとの強い思いを持つようになっているはずです。当会は今後も、そうした思いを地域のさまざまな方々とつなげることで、三重県の多文化共生をより進めていく力になりたいと考えています」（藤川副会長）

「外国人住民の子どもの教育のあり方」をテーマにした連続パネルトークの第3回の様子

Outline

正式名称	青年海外協力隊三重県OB会
設立時期	1975年
法 人 格	任意団体

Organization

代 表 者	鈴木智久（青年海外協力隊員／ナミビア・PCインストラクター・2010年度3次隊、シニア海外協力隊員／ケニア・PCインストラクター・2017年度2次隊）
会 員 数	約200人
入会資格	■三重県に縁があるJICA海外協力隊経験者 ■会の活動主旨に賛同する個人・団体
会 費	なし

Management

最高意思決定機関	会員総会
会員総会の頻度	毎年6月に開催
役員会の頻度	毎月1回開催
会員・役員間の主な連絡手段	メーリングリスト・Web会議

Contact

問い合わせ窓口	■suzukit@dles.jp ■070-9007-3954 ■https://www.facebook.com/JOCVOBOGMIE
情報発信の手段	■https://www.facebook.com/JOCVOBOGMIE

日本マラウイ協会

会の目的

■日本とマラウイの間の相互理解を深める
■文化・スポーツ・経済・科学技術などの分野での協力を通じて、両国の繁栄に寄与する

2019年に開催した「マラウイを語る集い」では、理数科教師隊員としてマラウイで活動した松岡洋一さん（1982年度4次隊＝右端）と塚田雅人さん（1983年度1次隊＝左から2人目）が、教え子だったマラウイ外務大臣（当時）のフランシス・カサイラさん（右から2人目）と再会。左端は当会の西岡現会長

協力隊経験者を含む、マラウイに関係がある個人・団体・法人が会員となっている当会が設立されたのは1983年。協力隊経験者による団体としての立ち上げだったが、その後、会員資格をそれ以外にも広げた結果、マラウイと日本をつなぐ言わば日本側のプラットフォームとしての役割を担う存在となっている。

活動の柱の1つとしてきたのは、マラウイに関する情報をまとめ、発信することだ。87年には、マラウイの公用語であるチェワ語の辞典を編集・出版。活動のもう1つの柱は、草の根レベルでの国際協力だ。2001年に開始した「ウォームハート・プロジェクト」は、現場の状況をよく知る派遣中の協力隊員からの要請にもとづき、校舎の修復などの資金を当会が積み立ててきた預金で支援するプログラムである。

年1回行っていた「シマを食べる会」を18年、日本とマラウイの関係について多様な参加者が幅広い議論を行う「マラウイを語る集い」に発展。マラウイへの協力隊派遣が開始されてから50周年にあたる今年21年は、「これまで、そしてこれから」をテーマに、オンラインで3カ月に1回のハイペースで実施している。

「在日マラウイ大使館や日本の外務省などともつながりながら、幅広い活動を実現できることが、当会の最大の特長だと思います。『マラウイにかかわり続けたい』という思いを持つ協力隊経験者の方は、ぜひ当会をその機会として利用していただければと思います」（西岡会長）

Outline

正式名称	日本マラウイ協会
設立時期	1983年
法 人 格	任意団体

Organization

代 表 者	西岡周一郎（元マラウイ駐箚特命全権大使）
会 員 数	189人
入会資格	JICA海外協力隊員としてマラウイに派遣された経験がある人を含む、マラウイに関係がある個人・団体・法人
会 費	■個人：3000円／年（入会金：2000円） ■団体：10000円／年（入会金：3000円） ■法人：30000円／年（入会金：10000円） ■賛助会員：1000円／年

Management

最高意思決定機関	会員総会
会員総会の頻度	毎年5月に開催
役員会の頻度	毎月1回開催
会員・役員間の主な連絡手段	メーリングリスト・Web会議

Contact

問い合わせ窓口	■info@japan-malawi.org ■https://www.facebook.com/japan.malawi ■https://www.japan-malawi.org ■https://www.twitter.com/Malawi
情報発信の手段	■https://www.facebook.com/japan.malawi ■https://www.japan-malawi.org ■https://www.twitter.com/JpMalawi ■機関紙『Kwacha』（年2回発行）

先輩隊員たちが振り返る
就職活動の記録。

先輩隊員の
シューカツ記

今月の業種：
民間企業
（卸売・小売業、サービス業）

就職先：

株式会社ビィ・フォアード

事業概要：中古自動車・自動車用部品の販売・輸出入、EC サイトの運営

今月の先輩隊員：坂下東士（さかしたはるし）さん

出身地：東京都
職種：コミュニティ開発
生まれた年：1993 年
派遣国：ベナン
任期終了時年齢：25 歳
隊次：2016 年度1次隊

現在の所属先：オートパーツ部販売グループ

タンザニアにあるカスタマーセンターの営業支援や販売管理、アフリカに輸出する自動車用部品の販売管理などに携わっています。

「株式会社ビィ・フォアード」ウェブサイト
▶https://corporate.beforward.jp/company

略　歴

■2016年3月、大東文化大学を卒業
■2016年6月、青年海外協力隊員としてベナンに赴任
■2018年6月、帰国
■2019年4月、株式会社ビィ・フォアードに入社

協力隊時代の活動を教えてください

地域の保健ボランティア（奥）と共に住民への保健衛生の聞き取り調査を行う坂下さん

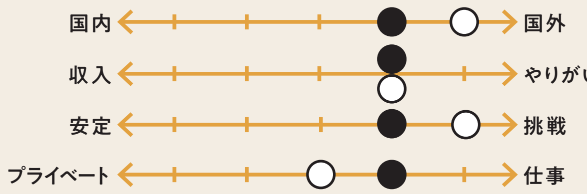
ドンガ県バシラ市ペネスル区の役所に配属され、住民への保健衛生啓発、新規作物の栽培導入支援、日本文化紹介などに取り組みました。

自己分析

強　み	■協力隊経験があること ■主体性があること
弱　み	■社会人経験がないこと ■大雑把であること
資格等	■TOEIC 880点 ■DELF B2

仕事選びの今昔。重視したのは？

協力隊参加前=●　協力隊参加後=○



就活の方針は？

「アフリカにかかわりがあり、英語やフランス語を使うチャンスがある企業」という条件だけを設定し、業種などで的を絞ることはせずに求人情報を探しました。この条件に合致する企業として唯一見つかったのが、現在の勤務先でした。

協力隊経験を応募書類にどう表現しましたか？

協力隊経験で得たものを仕事のなかでどのように生かしていくかについては、「協力隊経験で得た●●を、御社の●●の事業で●●のように生かすことで、●●の達成に貢献したい」といったように、できるだけ具体的に記述するよう心がけました。そうするためにも、現在の勤務先の事業を事前にしっかり研究しました。

協力隊経験を採用面接でどう表現しましたか？

現在の勤務先のビジョンのどの点に共感を覚え、応募を決めたのかについて伝える際は、その共感のもととなっている協力隊時代の体験を紹介することで、共感がうわべだけのものではないことを理解してもらうよう努めました。

現在の仕事のやりがいを教えてください。

自分で考えたアイデアに挑戦できる環境であり、その点にやりがいを感じます。また、入社1年目から海外出張も経験でき、さらにタンザニアにある自動車用部品のカスタマーセンターの業務に携わるなど、協力隊経験とつながる仕事にかかわることができているので、職業冥利を感じています。

今後の抱負をお願いします

コロナ禍に入ってからは海外出張が難しくなっていますが、タンザニアのカスタマーセンターの営業などは続いていますので、今後も協力隊経験を生かしながらそうした事業のさらなる発展に尽力していきたいと思っています。

シューカツ START　帰国の1カ月後

GOOD WAY!
JICAの進路相談カウンセラーには、目の前の就職活動の方向性だけでなく、今後のキャリアの方向性を踏まえて相談に乗っていただくことができたため、方針がぶれることなく就活を進めることができました。

情報収集
主にJICAの各種進路開拓支援（企業交流会、進路相談カウンセラー）、民間の就職エージェントを利用して求人情報を集めました。「アフリカにかかわりがあり、英語やフランス語を使うチャンスがある企業」という条件には一貫してこだわったのですが、これに合致する企業はなかなか見当たらなかったので、もう少し間口を広げて情報を集めてみたら良かったかもしれないと感じています。

帰国の2カ月後

GOOD WAY!
協力隊経験を簡潔にわかりやすく書くよう努めたことで、自分の協力隊経験についての理解が深まり、面接の受け答えにも役立ったと感じています。

書類審査
現在の勤務先に提出した書類は**履歴書**と**職務経歴書**です。自分の協力隊経験を第三者にわかりやすく伝える方法については、キャリア形成支援を目的とするJICAの帰国後研修に参加したり、自分の協力隊経験に関する情報をノートに書き出して整理したり、『クロスロード』の記事を参考にしたりしながら見つけ出していきました。

帰国の2カ月半後

GOOD WAY!
JICAの進路相談カウンセラーに模擬面接の相手をしていただき、どのようなことが聞かれるのかシミュレートすることができたので、本番でとまどうことはありませんでした。

面接
現在の勤務先の面接では**「協力隊活動の内容と、そこで得たもの」**などについて聞かれました。現在の勤務先は協力隊経験者の採用歴があり、かつアフリカでの事業の実績がある企業であるため、協力隊やアフリカについて通りいっぺんの説明で終始してしまわないよう、協力隊経験やそこで学んだことについてはできる限り具体的に話すよう努めました。

帰国の3カ月後

内定
応募…1社
書類審査通過…1社
内定…1社

帰国の10カ月後　就職！

MESSAGE
応募先企業に協力隊経験をアピールする場合は、協力隊経験で得たものをその企業でどのように生かすことができるかについて、できる限り具体的に伝えるよう努めることをおすすめします。

JICA海外協力隊ウェブサイト「帰国隊員の進路開拓についての相談受付」
▶https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/counselor/

※進路相談の対象は、青年海外協力隊および日系社会青年海外協力隊経験者のみとなります。
※カウンセラー／相談役により対応可能な日が異なりますので、あらかじめ電話またはメールでのご連絡をお願いします。

JOCV SPORTS NEWS

平和・平等・協力・健康……「スポーツが持つ力」と自身の専門性を掛け合わせ、未来をつくりあげるJICA海外協力隊経験者たちの現在の活動・仕事を紹介します。

特定非営利活動法人
ハート・オブ・ゴールド
東南アジア事務所長

西山直樹（にしやまなおき）さん

●パラグアイ
●青少年活動
●2005年度2次隊

人づくりにつながる 体育教育の普及を支援

1998年からカンボジアで「スポーツを通じた人づくり」の支援に取り組んできた特定非営利活動法人「ハート・オブ・ゴールド」。2012年から東南アジア事務所長として現場を統括してきたのは、協力隊経験者の西山さんだ。

❶カンボジアの中学校の体育授業　❷体育教員を対象とするワークショップで講習を行う教育省の担当官　❸中学校における体育授業の指導書の完成を祝う式典

練習を重ねて設定した目標を１つ１つクリアしていく過程で、物事を成し遂げるために必要な「希望」と「勇気」が養われる——。こうした力を持つ「スポーツ」の機会を創造することで、途上国の子どもや障がい者、貧困層などと困難を乗り越える「希望」と「勇気」を共有することを目的とする団体がある。元女子マラソン選手の有森裕子さんが主宰する特定非営利活動法人「ハート・オブ・ゴールド」（以下、ＨＧ）だ。１９９８年の設立以来、主な活動場所としてきたのはカンボジア。同国での事業を現場で統括する東南アジア事務所長を２０１２年から務めているのは、協力隊経験者の西山直樹さんである。

ＨＧ設立のきっかけとなったのは、内戦が集結してまもない１９９６年に同国で開かれたチャリティーマラソン「アンコールワット国際ハーフマラソン」（以下、「ハーフマラソン」）に、有森さんが招待選手として参加したことだ。内戦で残る地雷の廃絶運動を起こし、その被害者の支援のための資金集めをすることを目的とした、多くの日本人が協力したイベントだった。人づくり、国づくりを一から始めなければならなかった同国で、人々が「希望」と「勇気」を持つためにはスポーツの力を活用するのが有効だと考えた有森さんが、スポーツを通じた人づくりの支援を自立的・継続的に行うために設立したのがＨＧだった。

ＨＧは、毎年開かれるようになった「ハーフマラソン」の運営を担うことから活動をスタート。その後、カンボジアの教育行政を担う教育青年スポーツ省（以下、教育省）の要請を受け、小・中学校における体育授業の学習指導要領や指導書の作成、高等学校における体育授業の学習指導要領の作成、体育教員を指導するトレーナーの育成などに協力してきた。現在は、ＪＩＣＡの草の根技術協力のスキームを利用して、高等学校における体育授業の指導書の作成などを進めている。

「体育授業は、スポーツの技能だけでなく、目標達成を目指して努力や工夫を重ねる力、協調性などを身につけることができる教科です。ＨＧが体育教育への支援を始めるまで、カンボジアの体育授業は伝統の徒手体操を10分間ほど行って終わることがほとんどでした。そこから国全体の体育教育を充実させていくためには、教育行政に携わる方々と信頼関係を築いたうえで、体育授業の意義に共感してもらうことが必要でした。そのため、人と人のつながりこそＨＧの活動の基盤であり、この点は協力隊活動に通じると感じています」

国際協力とスポーツ

西山さんの人生は「国際協力」と「スポーツ」が両輪となってきた。テレビ番組がきっかけで国際協力に興味を持ったのは小学６年生のとき。国際協力の仕事に就きたいとの思いで中学時代から英語の勉強に力を入れ、米国の大学に進学した。協力隊に参加したのは大学を卒業した翌年だ。派遣されたのはパラグアイのＮＧＯ。貧困のために学校に通うことができない子どもたちを対象に各種教育プログラムを行っている団体で、西山さんはスポーツイベントの開催などに取り組んだ。任期を終えてからＨＧに入職するまでは、市民参加協力調整員などとしてＪＩＣＡの国内での業務に従事した。

一方、スポーツを始めたのも小学生のとき。地域の野球チームに入った。中学時代と高校時代は地域のサッカーチームでプレー。大学時代は学生チームに所属し、ＨＧの職員としてカンボジアに赴任してからもフランス人のチームに所属している。高校時代にはマラソンも開始。国内外のフルマラソンや１００キロマラソンの大会など、毎年のように何らかの大会に出場してきた。

「私はスポーツを通じてさまざまな人とつながり、さまざまなことを学んできました。『スポーツは人をつくる』というＨＧの活動の根底にある考えは、私自身がスポーツに取り組むなかで正しいと実感してきたものでした」

子どもの違いに立った授業

ＨＧへの入職を決めたのは、国際協力の現場の仕事に携わりたかったこと、およびＨＧの事業なら自身のそれまでのスポーツの経験を生かせるかもしれないと思ったことからだった。東南アジア事務所長に就いたのは入職の３カ月後。そのポストに就くことが前提の採用だった。

西山さんがこれまで携わってきたのは、中学校における体育授業の学習指導要領や指導書の作成の支援など。現在は、高等学校における体育授業の指導書の作成支援が仕事の中心だ。コロナ禍を受け、日本からオンラインで教育省とのやりとりを進めている。指導書の作成支援で難しさを感じているのは、体育授業のあり方について教育省の担当者にいかに理解してもらうかだと言う。

「子どもの運動能力はそれぞれですが、体育の学習指導要領ではどうしても、『逆上がりは何年生でできるようになる』など、一律に技能の習得目標が設定されがちです。本来は、それぞれの子どもの運動能力にあった習得目標を設定することが必要だろうと思います。そのうえで、「それぞれの目標にどれだけ近づけたか」や「目標達成に向けてどのような努力や工夫をしたか」といった評価、さらには「授業態度」や「ほかの子どもへの協力姿勢」など技能を離れた点の評価もする。それによって、「目標達成を目指して努力や工夫を重ねる力」や「協調性」など、体育授業で育まれるさまざまな力の獲得を促すことができるはずです。しかし、こうした評価を教員がこなすのは決して簡単ではないこともあり、作成している指導書にどれだけ盛り込むかについて、教育省の担当者との間でなかなか意見が一致しません。もちろん最終的に選択をするのは彼らですが、非常に重要な点だと思うので、今後もじっくり議論を重ねていきたいと考えています」

PROFILE●にしやま・なおき
1980年生まれ、神奈川県出身。2004年にサンディエゴ州立大学を卒業した後、05年11月、青年海外協力隊員としてパラグアイに赴任。貧困層の青少年を対象に教育プログラムを提供するNGOに配属され、スポーツイベントの開催などに取り組む。07年12月に帰国後、市民参加協力調整員などとしてJICAの国内での業務に従事。12年4月に特定非営利活動法人ハート・オブ・ゴールド（QRコード）に入職し、同年6月に東南アジア事務所長に就任。

©ISHIKAWA MASAYORI

JICA海外協力隊の

つぶやき

お題 ▶ 霊

イラスト＝牧野良幸

今月の1枚

空と大地

遊牧民として生きてきた派遣国の人々が神霊の宿る場所として崇拝してきたのは空や大地。派遣国でもっとも良い色とされるのは、自然界でもっとも高い場所にある空の青色だ。家畜の羊などを殺して解体するときは、決して大地に血を垂らさない。常に恩恵を受けてきた自然への信仰は深い。

ペンネーム：ちゅんた さん（アジア・体育・2018年度派遣）

★病の正体

任地のある青年の言動が突然おかしくなった。日本では精神科の受診を促すケースであろうが、彼は「悪霊にとりつかれた」とみなされ、それを祓う人のもとに通うことになった。「悪霊」を信じない住民は彼を避けるようになったが、信じる住民は「悪霊にとりつかれただけであり、おかしくなったわけではない」と彼を排除しなかった。どちらの住民が正しいのか、今もなおお考え続けている。

ペンネーム：Tipoko さん
（アフリカ・青少年活動・2017年度派遣）

★★先祖の霊

日本ではお盆の時期、迎え火を焚いたり、なすやきゅうりの精霊馬をお供えしたり、盆踊りを踊ったりして、先祖を懐かしみます。毎年同じころ、遠く離れた私の派遣国でも、先祖を祀る意図で、精霊を模した格好で人々が踊る祭りが各地で行われます。地球上、どこでも先祖の霊を大切にすることは共通であり、その思いで私たちはつながっているのだなぁと感じました。

ペンネーム：あん さん
（大洋州・PCインストラクター・2018年度派遣）

★★★サムライ

同僚たちとホラー映画を観に行ったときのこと。セリフが速くて理解するのは難しく、映像や効果音でなんとかスリルを感じることはできた。終盤、なんと「サムライ」の幽霊が登場。聞き慣れた日本語のセリフが流れた。観終わった後、同僚たちに「何と言っていたのか？」と質問されて盛り上がった。「サムライ」の霊は、同僚たちとの関係を深める仲人となってくれた。

ペンネーム：kinako さん
（中南米・環境教育・2018年度派遣）

JICA海外協力隊経験者を対象とする奨学金事業を開始

JICA青年海外協力隊事務局では、シニア海外協力隊・日系社会シニア海外協力隊以外のJICA海外協力隊の経験者のうち、JICA海外協力隊への参加により得た知識および経験を国内外で生かす社会還元を促進するために、我が国を含めた世界の平和と安定のための活動に従事することを目的に、国内外の大学院への進学を志望する方および進学している方を対象とした奨学金事業を開始します。毎年度10人程に対し、一律200万円の奨学金を給付するもので、返済義務はありません。募集・選考は年度に1回です。詳細はJICAのウェブサイトで追って公開します。

■問い合わせ先
JICA青年海外協力隊事務局 人材育成課「教育訓練手当」担当
E-mail：jvtpc-sinrosien1@jica.go.jp
※メールタイトルは【奨学金事業に関する問い合わせ】としてください。

JICAタイ事務所とJICAマラウイ事務所で派遣開始周年企画を展開

1981年にJICA海外協力隊の派遣が開始されたタイは、2021年7月に協力隊の派遣開始40周年を迎えました。現在に至るまでに120の職種の協力隊員が派遣され、21年7月末現在、派遣人数の累計は延べ1077人に上ります。JICAタイ事務所では派遣開始40周年を記念して、タイと日本の発展と信頼構築の歴史を振り返り、タイでの協力隊活動を紹介していくページをウェブサイト（QRコード）に設けています。

また、21年8月には1971年に協力隊派遣が開始されたマラウイが協力隊の派遣開始50周年を迎えました。これまでの派遣人数は世界最多となっており、2021年7月末現在で延べ1883人に上ります。JICAマラウイ事務所では派遣開始50周年企画として、これまでの協力隊活動を振り返るとともに、今後派遣される協力隊員への声援も込めて「思い出の一枚」と題した協力隊経験者によるリレー寄稿のページをウェブサイト（QRコード）に設けています。

「世界の笑顔のために」プログラム2021年度春募集の結果について

「世界の笑顔のために」プログラム2021年度春募集を4月20日～5月10日に行い、トンガへのそろばん1540点、アルゼンチンへのブラインドテニス用特殊ボール60点など、合計16カ国に対し81種・約3600点の寄贈をいただきました。コロナ禍により現地への輸送が予定より遅れていましたが、7月の最終週より各国への輸送を順次開始しています。10月上旬からは21年度秋募集が開始される予定です。

グローバルフェスタJAPAN2021の開催が決定

国内最大級の国際協力イベント「グローバルフェスタJAPAN」が2021年10月9、10日、東京国際フォーラム（東京都千代田区）のリアル会場とオンライン会場のハイブリッドで開催されることになりました。30回目となる今回のテーマは「多様性あふれる社会～思い描く未来を語ろう～」です。当イベントの詳細については、特設ホームページ（QRコード）でご確認ください。

クロスロード

令和3年9月号［第57巻第8号 通巻670号］
発行日　令和3年9月1日

編集・発行：
独立行政法人国際協力機構青年海外協力隊事務局
〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1
竹橋合同ビル

『クロスロード』はJICA海外協力隊のウェブサイトでも公開しています。

ご意見・ご感想をお聞かせください。
アイデアも大募集！

今月号をお読みになり、どのようにお感じになりましたか？　ご意見・ご感想をお寄せください。また、今後取り上げてほしい企画のアイデアや、ご紹介いただける情報がございましたら、ぜひお知らせください。

以下のようなアイデア・投稿を募集中です

- 派遣国での活動・生活の“失敗談”をお寄せください。
- 派遣国での活動・生活に役立つ“ちょっとした技”をお持ちでしたら、ご紹介ください。
- 日本でもつくることができる派遣国の料理のレシピをお寄せください。

eメール
一般社団法人協力隊を育てる会『クロスロード』編集室
crossroads@sojocv.or.jp

※本誌に掲載されている記事等の内容は執筆者の個人的見解であり、JICA の公式見解を示すものではありません。

隊員めし おかわり！

日本でつくる現地の「めし」は活力の源

エクアドルの食文化は多様性に富んでおり、地方によって大きく異なります。エンコカードは太平洋沿岸地域の代表的な料理の1つで、海の魚介類に野菜、ココナツミルクを加え、スープ状にしたものの総称です。その中で、えびをメインにしたものがエンコカード・デ・カマロンです。

私の任地であるナポ県は内陸のアマゾン地方だったため、どちらかと言えば海水魚より淡水魚を中心とする食文化が定着していました。しかし、町中へ行けば高価ながらも海の幸を楽しめるレストランがあり、なかでも抜群においしいエンコカードを提供してくれるお店がありました。頻度は少なかったですが、配属先の同僚たちとワクワク心を躍らせながらそこに行った思い出は、今も忘れられずにいます。

今月の料理人

中村千晶（なかむら ちあき）さん（旧姓：田中）
（エクアドル・料理・2010年度3次隊）
●活動内容：職業能力開発機構のアマゾニアセンター（ナポ県テナ市）に配属され、製菓技術の指導などに従事。

エクアドルの伝統ココナツ料理「エンコカード・デ・カマロン」

材料（4人分）

えび（ブラックタイガー）…20尾
トマト…大1個
玉ねぎ…小1個 ┐
赤ピーマン…1/2個 │
緑ピーマン…1個 │
にんにく…1片 │ A
パクチー…好みの量 │
パセリ…好みの量 ┘
白ワイン…大さじ1
クミン（パウダー）…小さじ1
ココナツミルク…300ml
塩…小さじ1.5〜2
こしょう…適量
油…大さじ1
白米…茶碗4杯分
添えパクチー…適量

つくり方

❶えびの殻と背わたを取り、塩を揉み込んで水洗いする。洗った後はペーパータオルで水気を取り除く。
❷トマトの皮を湯むきした後、角切りにする。
❸Aをすべてみじん切りにする。
❹フライパンに油とにんにくを入れ、にんにくを焦がさないよう中火でじっくりと加熱して、にんにくの香りを油に移す。
❺❹に玉ねぎを加え、しんなりするまで炒める。
❻❺にトマト、赤ピーマン、緑ピーマン、白ワイン、クミン、塩、こしょうを加え、5、6分煮る。
❼❻の火を少し強めてココナツミルクを加える。軽く煮立ったら❶を加え、火が通るまで煮る。
❽❼にパクチーとパセリを加えて混ぜる。
❾炊いた白米と❽を皿に盛り付け、添えパクチーを載せれば出来上がり。

ひとくちメモ

えびは火が通りすぎると硬くなってしまいます。火の通りが早いので、色が白く変わったらすぐに火を止めるようにしてください。

今月号の表紙

ガーナ

文＝柏木健太（かしわぎ けんた）さん
（コミュニティ開発・2018年度1次隊）

私はガーナの郡役所に配属され、農家の収入向上に向けた支援に取り組みました。任地の主要な農産物はパイナップルでした。主な販路は国内の他の地域で外資系企業が構える加工工場でしたが、受注量は不安定で、かつ利益率も低い商売となっていました。そうしたなか、私は任地の農家と共に国内の他地域の市場を回るなどして、安定して受注できる新たな販路の開拓を試みるなどしました。

※柏木さんの活動の詳細は6〜7ページで紹介しています。

2021年9月1日発行（毎月1回1日発行）第57巻第8号 通巻670号
編集・発行 独立行政法人 国際協力機構 青年海外協力隊事務局
〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1 竹橋合同ビル